ヨシツネ 藤原(後京極)良經 (一一六九—一二〇六) 新古集時代の歌人。兼實の子、三十四、攝政に爲つたが、數年ならずして一夜盜(?)の爲に殺された。著作に「月清集」(歌集)「殿記」(日記)など。「人住まぬ不破の關屋の板庇あれにし後はたゞ秋の風」「天の戸を押しあけ方の雲間より神代の月の影ぞ殘れる」——(七八)

ヨシノブ 大中臣能宣 (九二一—九一) 平安中期の歌人。「後撰集」撰者。(梨壺五歌仙)の一。歌人賴基の子で。歌人輔親、伊勢大輔の父である。歌は「拾遺」「詞花集」に收む。「御垣守衞士の焚く火の夜は燃えて晝は消えつゝ物をこそ思へ」——(四八—四九)

ヨシミツ 土佐吉光 (一三〇〇頃在世) 鎌倉末期の畫家、姓は藤原、其の父に就いては諸說ありて定かでない。從四位下、刑部大輔に叙任せられた。後伏見天皇の正安頃有名なる「法然上人行狀畫傳」四十八卷を畫き、又花園天皇の正和年中紫宸殿の賢聖の御障子を畫いたと云へば、其の頃榮えた人であらう。「法然上人畫傳」は京都知恩院に傳はり、本邦繪卷物中最も浩瀚なものである。——(二二七六)

ヨシモト 二條良基 (一三二〇—八八) 南北朝時代の歌人。後醍醐天皇家歷の後北朝の四帝に仕へて從一位關白太政大臣まで陞つた。文才あり和歌を好み且當代に珍らしい學者であつた。連歌を得意として初めて其選集「菟玖波集」を出し、當代歌道の名家頓阿と歌論をたゝかはして「愚問賢註」を書いた。紀行文に「小島の口すさみ」あり、其他有職故實に關する著述を數多く殘してゐる。——(九五)

ヨシフサ 藤原良房 「古今集」の歌人。——(三九)

ヨシベイ 桑木與三兵衞 大阪の俳優。——(一七二一)

ヨシユキ 大藏善行 平安初期の儒家。「三代實錄」の撰修に與る。——(四〇)

ヨノコ 鵜殿よの子 江戸中期の歌人。縣門三才女の一。——(一二六)

ヨモノアカラ 四方赤良 ショクサンジン(太田蜀山人)を見よ

ヨモノマガオ 四方眞顏 マガオを見よ。

ヨリナリ 清原賴業 平安末期の儒家。正五位下文章博士、高倉天皇の侍讀であつた。——(五七)

ヨリハル 東儀賴玄 伶人。——(二一四〇)

ヨリヒラ 石川依平 (一七九一—一八五九) 江戸末期の國學者歌人。遠江の人。冷泉爲平の門人。著書に「萬葉集三山歌考」「柳園詠草」等。「もの、ふの命を露と爭ひし荒野の末に秋風ぞ吹く」——(一三五)

ヨロク 淺尾與六 (一八〇一—一八五一) 俳優。——(一七八〇)

ラ

ライエン 雷淵 金朝の文家。字は希默、應州渾源の人。(題黃華泉煙樹)「疎柳醉茆亭、孛下長江路、不見亭中人、蕭々煙景暮」——(三〇一)

ライザン 小西來山 (一六五五—一七一六) 江戸初期、談林派の俳人。大阪の人で小西行長の子孫である。「我寐たを首あげて見る寒さ哉」辭世に「來山は生れたとがで死ぬるなり、それで怨みも何もかもなし」——(一八一)

ライジョ 賴助 平安中期の佛工。覺助の子。長子。——(二四二〇)

ライン 羅隱 晚唐の詩人——(二七九)

ラウホ Christian Daniel Rauch (一七七七—一八五七) ドイツの彫刻家。アロルゼン(Arolsen)で生れ、ドレスデンで歿した。初めは古典彫刻の風格とトルヷルゼンの影響をうけ、後寫實的の手法を交へて來た。ローマ及びベルリンに製作を殘してゐる。紀念銅像彫刻では近世第一の大家である。——(二五〇五)

ラクワン 羅貫(貫中) 元代の小說作家。——(三〇八、三〇九)

ラクヒンノー 駱賓王 初唐の詩人、婺州義烏の人。——(二七一)

ラザン 林羅山 (道春)(一五八三—一六五七) 江戸初期の儒家、名は信勝、字は子信、俗稱文三郞。出生地は京都であつて、壯年の時代には同地に塾を開いて居つたが、後年家康の寵遇を受け、歷江戸に往來し、遂に移住して江戸に歿した。幼時より記憶強く時人惑じて耳如藏と言ふ。頗る讀書を好み自ら天下の至樂なりと稱した。壯時旣に獨學にて程朱學の意義を解して、其說を奉じたが後に藤原惺窩に就きて益々宋儒の奥義を極めた。純然たる程朱子の學說を奉じて、陸象山、王陽明の說を以て儒中の禪なりと批難し、吾國の神道を尙びて老佛を排斥した。專ら道を日常卑近の間に求め、實踐躬行を奬勵した。吾國朱子學派の翹楚にして、大學頭を世襲した林家の祖である。儒學の傍詩文亦巧であつて、「羅山文集」「羅山詩集」等世に名高く、大火の爲邸宅藏書皆灰燼に歸した後程無く宿痾募りて歿した。享年七十五。著書は「本朝通鑑」「儒門思問錄」「無極太極之記」「理氣辨」「六義考」「道統小傳」「經典題說」「陽明捃屑」「老子攷說」「本朝神社考」「五山文史編」「徒然草野槌」其他百三十種に餘つて居る。——(一三九、一四〇、一四三)

ラシーヌ Jean Racine (一六三九—九九) フランスの悲劇作者。ラ・フェルテミロンで生れパリーに出て當時文壇の名家、ラ・フォンテーヌ、モリエール、ブアロー等に交はり、劇壇に打つて出て、概ね、成功

を續けた。——(五四三、一八五六、解題九一)

ラスキン John Ruskin (一八一九—一九) イギリスの美術批評家、社會論家。一八一九年に生れた。父は酒商であつたので商業上度々大陸に旅行する機會があつた。ラスキンも亦た伴はれて歐洲大陸の風物、藝術に接し、且激勵さるゝ事も多かつた。一八四二年にオクスフォードを卒業し間も無くかの有名な「近代畫家論」を著はした。其一册目は卽ちオクスフォードの卒業論文であつた。其れから三年經て二册出來、一八六〇年で都合五册完結した。彼は繪畫の研究の外別に建築論數篇を出版した。繪畫の上に於けるラスキンは單に英國の繪畫界に及ぼした功果ばかりではなくまた實に歐洲繪畫の新氣運の鼓吹者として充分傳ふべきものであつた。彼は實にラファエル以前の典雅入神の筆致と南歐熱烈の畫風を說いて久しく眠つて居る藝術界に刺激劑を注入しやうとしたラファエル前派の先驅者唱導者であつた。一八七〇年にはオクスフォード大學の美術教授となり八四年病氣の爲めに職を辭した。ラスキンはシエレイやキイツと等しく美を感受する力は非常に烈しかつたけれども、後の二人と趣きを異にするのは彼等は美のみを遊離さして玩賞し享樂するけれどもラスキンは美を人生の心と別にし、宇宙の神性といふものと特種のものとする事が出來ない點であると思ふ。ラスキンは寧ろワーヅワースと傾向を同じくして居る。「外部の自然も亦た人間のやうに身體も心も持つて居る。が自然の心は神である」"External Nature has a holy and soul like a man; but her soul is the Deity." といふのはかの「ティンタアン・アベイを再び訪ふ歌」"(Lines on Revisiting Tintern Abbey)の內で「物の心に見入れ」"Sees in to the life of things"と歌つたワーヅワースと何んなに似た思想であらう。此物と形を通じて其內にある心と意味を捕へるといふ思想はラスキン後半生の活動を暗示して居る。彼は一面詩人であり批評家でありながら更らに其一面には眞面目な社會改良家といふ重大な責任を持つて生れて來たのであつた。一八六〇年「近代畫家論」の完成の頃からのラスキンは其全力を社會改良と道德論の方面に傾注した。彼は異つた方面から進んで思はずカーライル、キングスレイ、モーリスと顏を合はせるに至つた。著作としては「近代畫家論」(Modern Painter 1843—1860)を初めとして "Seven Lamps of Architecture" (1849) "Stones of Venice (1851—53) "Architecture and Painting" (1854) "Political Economy of Art" (1858) "Unto the Last" (1861) "Munera Pulveris" (1862) "Sesame and Lilie" (1865) "The Cestus of Anglaia" (1866) "The Ethics of the Dust" (1286) "The Crown of Wild Olive" (1866) "Time and Tide" (1865) "The Queen of the Air (1869) "St. Mar's Rest" "Praeterita (1885) 次に「近代畫家論」の大旨を語らう。

近代畫家論

(由)來ラスキンの名著數多き中に「ヹニスの石」「藝術經濟學」弁に建築術繪畫の講義錄等は得難き名著である。而かも僅か二十四歲でオクスフォードの一得業生として出せる書が、社會の注視を集めて賛否の聲に包まれて、他日藝術上の大寳典と成つたのは實に此「近代畫家」(モダーン・ペインターズ)である、初め一八三六年に畫家ターナーがロイヤルアカデミーの展覽會に出品した作物に就て、大にターナーの技を拙なりと貶した世評に對し、決然立つて盛んにイギリス近世の畫家を論じ、ターナーの技能を辯護した長論文は卽ち後に此書の第一卷と成つたものである、最初「ターナーと古作家」と題したが出版に際し改めたのである、一八四二年氏がオックスフォードの卒業論文として稿成り、翌年出版せられたのは第一卷である。三年を經て第二卷の刊行を見、全部五卷を完成したのは一八六〇年であつた、後一八六七年に再版改訂せられたが、大體第三卷以下は事情の爲に匆忙の間に執筆した故にや、前二卷に比して筆致の靈妙は多少劣つて居るとの評がある。(組成)——「近代畫家」は前記の如く全部五卷で有つて、通じて九編に分れ約千頁以上の大册である、各項目は頗に失する故尋けないが眞、山水畫、山の美、葉の美、雲の美、關係觀念等の項目の下に自家の見解を縷述してある。第二卷以下には樹葉山水其他の畫法を指導した挿圖數十面を收めて居る。(論點)—本書は言ふ迄も無くイギリス近代畫家の論評を試みた者であるが主として近世のイギリス派風景畫を賞發して居る。風景畫の筆致は寧ろ古人よりも近代の名家に於て優つたものがあると考へて居る。加ふるに近世の風景畫家が眞と美とを併せ表現する點は到底古人の企及し得ない處である。其近世の長處を最も直截に證明したる例としてターナーを擧げて居る。蓋にも說いた如く本書は元來ターナーの作品に加へられた世評を反駁せん爲に草したる論文が其根底であるから、全篇各方面より種々の題材に就て論じて居るが、結局ターナー畫風の辯護に力を盡して居る、而かも其のターナーを賞讃する所以は氏の畫法に於て最も充分に表現されたる眞善美の一致はラスキンの持論である故であらう、內容(一)卷頭一般原則として藝術上に表現すべき觀念の性質を論じ藝術に於ける偉大といふものゝ定義を擧げ、畫家の知力と技術的知識とを區別し繪畫は一の言語に過ぎず、技術殊に繪畫は其自身には値を有せないが思相の傳達として無上の價値ある Noble and expressive language である。畫に於て自然を表はす方法を學ぶは、言語を以て思想を表は

す方法を學ぶ如きものである。畫家と詩人とは相比すべき名稱である。言語と思想間の精密なる限界は判定し難きも、粧飾的言語と說明的言語とは別である。藝術上表現されるのは勢力の觀念である、尙摸倣なる意義は往々誤用せられて居る。單なる摸倣は卑賤なるもので何等の困難無く成し得るものだ。而かも眞とは甚しき懸隔ありて摸倣と眞とは、到底兩立し得ないものである。彼は美を論じて曰く「智の努力を加へずして其の外面の性狀のみを默想して快樂を得る對象を美と稱する。形にても色彩にても快感を生ずると若らざるとがあるは、恰も砂糖は好むもニガヨモギは好まざる理由が、道理を以て說き得ざるに等しい。研究の効は吾等を本能及人性に導くに過ぎない。更に曰く趣味(Taste)と判斷(Judgment)とは全く別物である。後者は諸種の方面に於ける智の作用を一般に示す語である。凡趣味は道德的感情と知力と關聯交感するもので、直接に知力の作用は無いが智美(Intellectual beauty)に趨する一段階である。美は人心中に起る觀念の最高貴のものにして、人類は斯く造られたる神の意思に從つて、本能的に感ずるのだ。併しながら知的努力を全く美の觀念中から除斥せんとするのでは無い。是は美の說明の大體であるが、尙勢力(Power)壯美、眞に就て論じ、特殊の眞は一般よりも重要であること、屢顧るゝものよりは稀に見るものが一層重要なる眞なることを論じて居る。調子は、色彩、空間、蒼空、雲、地球等の卒下に自己の見を說明して居る。地球篇にては一般構成、中央、山脈、低山、前景が說き、水の篇にては古人の畫ける水、近代畫家の畫ける水及ターナーの其れとを較說して居る。何れも美學上の立脚地より繪畫としての價値を論じたのである。第三卷に至り主として古今の山水畫を論じ、第四卷には山の美を、第五卷には樂及び雲の美を解釋してある。日沒の壯嚴を說き、アルプス山の雪景の美を解釋し、畫家の技に就き縱橫の筆を揮つて居る。其の自然の無限を說ける條には、自然の大精神作用は最高貴のものに於けるが如く最低位のものにも作用し、同一の無限が高低等しく存在して、神聖、統一、力、完全等の像を表現すると語つて居る。彼の美學上の根本思想は粗々窺知し得られる。(眞善美合一)——ラスキンの所謂美は前にも言つた如く既に眞てふ色彩を帶びて居る。美を全く知的に解するのでは無いが、少くとも知的方面を全く閑却したものとは言ふを得ない。而かも尙美と善とを相聯合せんと試みて居る。本書の中にも散見し得る思想てあるが、以爲く圓滿なる美の中には、必ず圓滿なる善が其外容相反する如きも同一の根底に立つて居る。我執を脫して眞に美を愛好せば劣慾自ら去りて高潔善良の生活に入ることを得る。道義を重んじ之れが確固たらしめんとて美を愛好し其の研究に進むのだと言つて居る。理想が圓滿に表彰せらるゝ繪畫は必ず知力的道德的の二要素を具有するもので、眞と美と繪畫上の理想の表現とは繪畫の三大要點だとしてある。元來彼は此書に於て美術の眞相を論じ、即ち美と共に眞理と誠實とを說き、世を感化し、世を服從させんと試みたのだ、是れラスキンの主唱した處の眞善美一致の說である。又彼れは摸倣を排斥するが、畫家を以て自然に行かしめんと呼號して居る。自然の意義を發顯せんとする外何物をも顧慮すること無く、謙遜、單純、正直、勤勉、忠實なる心を以て自然と共に行動せよと敎へた言がある。(倫理思想)——ラスキンの思想は前記の如く美と善とを一致のものとしてある、故に本書の中にも藝術論が往々人生論の域に進入して、更に敎訓風、倫理的に迄及んで居る、就中傲慢(Pride)を總ての過誤の最劣等のものとし、他の情緒は時に善良に用ひらるゝも是のみは萬事を不良にすると殊に技術上の傲慢を誡むること頗る切である。彼は批評家より實行家に進み晩年には詩人と言ふよりも寧ろ聖人の域に近づきつゝ在たが、爰にも禁慾主義を排斥して居る。中世紀に於ける宗敎的スパルタの如き武備的及び近世の蓄財的禁慾主義の三に分類して、武備的禁慾主義は智的要素を斥けないから比較的採るべきであるが要するに利害相伴つて決して圓全なる思想では無いと言つてゐる。恐らく彼の思想は後年迄纖纖として彼の道德的實行をして世の道德家の如き冷血行爲に陷らしめず一種の生氣を有せしめたのであらう。尙彼が第一印象の題下に總ての事物の最大眞理は最初の一見にて感得するのである。久しく見る間には誤れる見解の爲其眞を知り得ないが更に長く見る時は再最初の感に廻るものであると言つて居る。彼の孔子の弟子季文子の三思而後行を誡め再是可との言と比して思想の異同を面白く味ひ得るてはないか。此他紳士(Gentlemen)の解釋等は最興ある文字である、總收「近代畫家」は斯道の後進には有數の寶典たることは言ふ迄も無いが、中に自主の徴が無いても無い、殊に本書はラスキンが年少氣鋭の時代の筆であるから生氣溌剌たる趣があると共に、晩年の著に比して思想の圓熟を缺いて居る。此は何れの作家にも通有な事であつて、獨此著には限らぬが、唯彼が善美の合一を說いたことは大に世の批難がある。二者を兩立させんと欲して善の威嚴と美の神聖とを破壞した者と言はれる。——(八一四)

ラッファエリ Jean François Raffaëlli (一八五〇—) フランスの畫家、彫刻家。パリーて生れジェロームの弟子となつた。初期の作は下層社會の生活

極端に寫實的な描寫をやつたが、後漸く温和な作風に轉じた。——(二三七九)

ラファエロ ラファエル Raphaello Sanzio (一四八三—一五二〇) イタリアの畫家。——(二三三四)

ラフゴンテーヌ Jean la Fontaine (一六二一—九五) フランスの詩人。チエリ城て生れ、宗敎、法律の敎育をうけ、家庭の困難から、文學へ心をむけた。——(五三九)

ラブレイ François Rabelais (一四八三—一五五三) フランスの滑稽作家。文藝復興期の立者の一人である。シノンて生れパリーて歿した。——(五三四)

ラマルチーヌ Alphonse de Lamartine (一七九〇—一八六九) フランスの詩人。小說家。マーコンに生れた。イタリア旅行ののち、王室に仕へて、外交官となつた。——(五七三)

ラム Charles Lamb (一七七五—一八三四) イギリスの論文家。ロンドンて生れた。家貧にしてわづかに給費生となつてグライスト・ホスピタル(Christ Hospital)に學ぶことを得、爰ではじめてコールリッヂとあひ生涯渝らざる親交を結んだ。十五歲の時學校を出てゝ南海會社書記となり、次いて東印度會社に入り、病身の父に代り小胸に一家を養つて、一八二五年に至つた。然るに此間一七九六年姉メリーは發狂して母を殺し、一家の平和はこれが爲に亂された。これよりしてラムは一生姉の看護に心をつくし、病やゝよき折は、相共に著作に從ひ、常に和平快活の心を以て悲慘なる境遇に處した。初めて文學にあらはれたのは一七九六年コールリッヂが"Poems on Various Subjects"に首のソネトをよせしに始り、次て二人の閑暇感想を歌たつ間沒韻の詩(一七九八)可憐なる散文の物語"Rosamond Grey"エリザベス文學に樣式をとつた悲劇"John Woodvil"(1801)ファースに"Mr. H"(1806)の作あり、平生エリザベス文學に渴仰の想をよせ"Specimens of English Dramatic Poets who wrote about the time of Shakespeare"に當代の戀の隱れた作家を復興せしめ、後て批評眼の見ならざるを示し"Tales founded on the plays of Shakespeare"(一八〇七)"Adventures of Ulysses Poetry for Children"(1809)等を姉と合作して古典を殘した。されどラムの文名不朽に傳ふるは"Essays of Elia"(1823)二卷あるによる。これは一八二〇年London Magazine"の發行に際して南海會社の老書記エリアの名をかりて出たのを始として長短三四十種多くは輕き諧謔の類にすぎないけれど輕快洒脫の底に一時の悲哀を含める一個ロンドン市井の兒の目は髮髯としてこの裏にあらはれてゐる——(八〇六)

ラモー Jean Philippe Rameau (一六八三—一七六四) フランスの音樂家。ディジョンて生れ、パリーて歿した。オルガニストとして、作曲家として、殊に樂理の名家として知られる。

ラロシュフコー La Rochefoucauld (一六一三—八〇) フランスの文人。フランス貴族の出、パリーて生れた。政治的紛亂の中に身を投じて劍戟の間に立つこと二十年の後、公生活から退いて"Memoires"と"Maximes"の筆を採つた。——(五四六)

ラング Andrew Lang (一八四四—) スコットランドの詩人。セルカーリ(Selkirk)に生れ、オクスフォードに學んだ。——(八一二)

ラングランド William Langland (一三三〇?—一四〇〇?) イギリスの詩人。——(六八九)

ランコー 高桑閑更 (一七二六—九八) 江戸中期の俳人。加州金澤の商人の家に生る。名は長次郎希因を師として、南無庵、二夜菴、半化坊等の號がある。商家業を廢つて家を出て、中年醫師となつた事もあつたが、蕪村曉臺相次いて物故するに及び、斷然藥函を蹴つて俳壇に立ち後五年にして、花の本宗匠となつた。京都東山双林寺に芭蕉堂を建立して其處に終つた句風は平穩、多少の俗氣を交へてゐる、「更行くや蕊地を遣ふ町の中」——(一九四)

ランザン 高井閑山(一八三一頃在世) 江戸中期の讀本作者。——(一六六)

ランセツ 服部嵐雪(一六五四—一七〇七) 江戸初期の俳人、淺路小榎蕉村の人、宝應三年生る。江戸に出て二三の諸侯に仕へて、初めは武士、後を捨てゝ蕉門に入る。彼が境遇の變化はむしろ俳道に入つてから後にあり。その要裂女の死、俗醫譽によりて得たる禪、芭蕉に似て、しかく廣からず大ならずと雖も、等しく情緒の靜かな動搖に居たる事を認め得る。蕉門一派は彼の開くところ、二世夏登、周竹、宋太等は此の門の雄、其角と共に、芭蕉歿後江戸俳壇の重鎭であつた「玄桑集」「其雋」「賀若草」「若水一週忌」「杜撰集」「或時集」「わかな集」等の著がある。寶永四年十月歿、年五十四歲「うまず女の離別くぞ哀れなる」「名月や煙道行く水の上」「ふとん着て寐たる姿や東山」——(一八六)

ランダー Walter Savage Landor (一七七五—一八六四) イギリスの詩人。散文家。アーキックて生れ。オクスフォードのトリニチー・カンツヂに學んだ。始終要君と喧嘩してはイタリアへ走つた、半積廢的な奇僻の多い人てあつた。——(七八一)

ランダイ 井上閑雪(一七〇五—六二) 古學派の儒者。岡山侯の儒官の家に生る。名は通稱、著書に「三韓世裝」以下、數種。——(一三九)

ランテイ 高野蘭亭 (一七〇五—五八) 祖徠門の詩人。江戸の人。著作に「蘭亭集」等。——(一四一)

ランドシー E. Sir Edwin H. Landseer (一八

〇二一七三）イギリスの動物畫家及肖像畫家、彫刻家。一八五〇年士爵に叙せられ、王公の愛顧するもの多かつた。その有名な青銅の獅子の像は、トラファルガー辻に一八六九年建設せられた。——（二三五八）

リ

リーベルマン Max Liebermann（一八四七—）ドイツの畫家。ベルリンで生れた。ライプツヒの美術學校に學んだ（一八六八—七三）その後パリーに赴きムンカクシイ及び殊にミレー、コロー、等フオンテンブローの風景畫派の影響をうけた。彼は初めてドイツに印象派の畫風を弘め、形式に囚はれて一派の生氣の動く者なきドイツの畫界に清新な自然主張を鼓吹して、進んで分離派（Sezessionist）の唱首となつた。——（二三五五）

リアン 李燮　金朝の文家。——（三〇〇）

リガ 李賀（長吉）七九〇—八一六）中唐の詩人（雁門太守行「黑雲壓城城欲摧、甲光向日金鱗開、角聲滿天秋色裡、塞上臙脂凝夜紫、半卷紅旗臨易水、霜重鼓寒聲不起、報君黃金臺上意、提携玉龍爲君死」——（二七八）

リギザン 李濟山　**リショーイン**（李商隱）

リギョ 李漁（笠翁）明末清初の戲曲作家、小說家。笠翁と號す。浙の地に生れ、金陵に住んだ。旅遊を好み、「天下に遊遊する幾ど四十年海內の名山大川十に六七を經た」と傳へる。著作は戲曲の「十種曲」小說の「十二樓」の外、畫論に「芥子園畫傳」あり、詩、文、詞、隨筆集を稱して「笠翁一家言全集」といつた。——（三一八）

リキン 李欣　盛唐の詩人——（二七七）

リクウン 陸雲　西晉の詩人、字は子龍、陸機の弟。——（二五八）

リクカ 陸賈　漢初の政論家、辭賦家。「新語」十二篇を殘した。——（二五三、二五四）

リクキ 陸機（士衡）西晉の詩人。字は士衡、呉郡の人、呉の名族の末に出た。成都王欽に屬して長沙王征討の軍に從ひ戰つて敗軍し、呉志ありと讒言されて殺された。——（二五八、二六六）

リクシ 陸贄　唐の文人——（二八〇）

リクタンビ 陸探微　六朝宋の畫家。字は元遠、呉の人である。性來、丹青を善くして、佛像人物の妙を極めなつた。たのは勿論、山水草木は筆に任せて成り、而かも、文法、悉く備はつたといふ。實に包前孕後、古今獨歩といはれてゐる。其の子、綏、安期の二人も、家學を繼いで、當時、衆を壓して居つた。——（二二七九）

リクニヨ 釋六如　京都智恩院の僧。淸詩人。著作に「葛原詩話」「六如詩鈔」等。——（一四一）

リクユー 陸游（放翁）南宋の詩人。字は務觀、放翁と號し、山陰の人である。徽宗皇帝の宣和七年十月陸上の舟中に生れた。その翌年は即ち欽宗の靖康元年で、又その翌年は二帝北行の年である。淳熙二年、放翁年五十一のとき、范成大來りて蜀に將帥となつた。陸游の才を認めて、辟して參議官となした。成大は詩人である。故に兩人は常に文學上の交をなし、禮法に拘ばらなかつた爲めに、人非頑法を譏つた。因て自ら放翁と號した。七年山陰にかへり、官は太中太夫寶謨閣侍制に至りて致仕した。後渭南伯に封ぜられ、食邑八百戶を賜はつた。嘉定二年に卒す年八十五。成都書畫「大城小城柳已青、東蓋西蓋雪正晴、鶯花又作新年夢、綠竹當門靜夜聲、廢苑煙蕪近馬動、清江春漲柏堤平。樽中酒滿身强健、未恨飄常過此生。

リクワ 李華　唐代の文家。——（二八二）

リクワン 風璃寬　大坂の俳聖。——二世（一七八八—一八三八）——（一七七三）三世（一八一八—六三）——（一七〇）

リゲンギヨク 李群玉　晚唐の詩人。——（二七九）

リケンカ 李獻可　金朝の詩人。——（三〇〇）

リコー 李觀　仁宗の世の文家。——（二九〇）

リコーリン 李朗　中唐の散文家。——（二八〇）

リゴーリン 李公麟（李龍眠）宋の畫家。麟字は、伯時、龍眠居士と號した。舒城の人である。神宗の熙寧年中、進士となり、四州錄事參軍に進んだ。父多くの法書名畫を藏したるより、自ら感化せられ、幼にして書を作りて、人を驚かし、長じて亂行の書法益々進み、晉唐の宗傳を得、殊に小楷が最も勝れ、世寶つて寶秘する所となつた。文學また時に名高く、佛道を學んで、深く其の微旨を得た。又多く奇字を識り、夏商の彝器をよく考定した。そして博く鐘鼎古器珪璧を求めて玩賞した。また繪事に於いては、博學精識用意到らぬ處なく、目に觀る所のもの、皆繪となつて表はれた。白描の人物道釋は最も得意で、顧陸張吳を始め前人の長を集めて一生面をひらいた。山水道釋は精微入神なる以て、後代の師表とせられた。伯時、畫を作るに、大抵立意を先とし、布置、點染を後とし、多くは設色しない。而かも千變萬化測るべからざる趣を備へた。官に仕へて、京に居ること十年。其の間一たびも、權貴の門に遊ばぬ、休沐を得、佳日に遇へば酒を携げ、同志二三人と名園を訪ひ、石に倚し、蔭林の傍水に臨んで悠々日を終へたといふ。僅かに、朝奉郎に至つたのみであつたが、而かも、朝に立つては藉々たる名聲、時輩を壓した宋の哲宗の元符三年、致仕して龍眠山に歸つた。——（二二八一）

リシクン 李思訓（附李昭道）唐代の畫家。思訓。字は建見、唐の宗室孝斌の子である。早く給を以て當時に

稱せられた。また、一家兄弟叔姪五人並に畫名を擅にした。是れを以て、唐の高宗は思訓の居た「華清門第」と榜なさせた。當時、江都の令であつたが、武后の革命に、官を棄てゝ匿れた。後ち玄宗の開元の初左武衛大將軍となり、進んで彭城公に封ぜられ、開元四年に卒した。年六十六。六年秦州都督を追贈せられた。其の畫く所の山水、草木、花鳥、獸畜、皆よく、その態を盡し、當時第一であるといふ。殊に、山水は金碧を用ひて、一法を開いた。其巻色山水は後人の師とする所である。昭道は思訓の子。官は太子中書舍人太原集直集賢院である。玄宗の朝には寵愛厚く、特に第邸を興慶宮の側に賜はり、毎に御宴に列した。內庭の畫物、國家の典禮、みなその寫す所である。其の山水は、父の法を稍々變じて、工緻細密の妙、父に過ぐるものがあつた。又鳥獸をもよくした。畫道に所謂北宗は、實に此の父子によつて描かれた、山水花鳥畫開祖の流である。世に思訓を大李將軍といひ、昭道を小李將軍といつて稱讚する。——（二二八〇）

リシュバン Jean Richepin（一八四九—）フランスの詩人、小說家、劇作家。メデアに生れ、青年の頃は軍人、俳優、船士として送つた。で、此期の作物は自ら光彩あり、舊套を破つたものであつた。彼の小說は心理解剖の好例とせられる。——（六〇四）

リジュンホ 李純甫（屛山）金朝の文家。字は之純、屛山と號した。——（三〇一）。

リジョー 瀧亭鯉丈（一一八四四）。江戸末期の戲作家。通稱八藏。江戸下谷廣德寺前に住み櫛屋を業とした。滑稽本の作者として一時世に持はやされた外に、新內の三味線なども巧にした。「花暦八笑人」「滑稽和合人」等は滑稽本の名作である。——（一七三）

リショーイン 李商隱（義山）晚唐の詩人。字は義山、杜牧と共に晚唐詩人の頭目で、博聞强記を以て稱せられた人ではあるが、一生官途に志を得ずして歿した。（夜雨寄北）「君問歸期君有期、巴山夜雨漲秋池、何當共剪西窓燭、却話巴山夜雨時」——（二七九、二八三）

リスト Franz Liszt（一八一一—八六）ドイツの作曲家。——（一九九四、二二五二）

リセイ 李成　唐末の畫家。字は咸熙、長安の人、其の先は、唐の宗室である。五代多事の際に流寓して、雖を北海に避け、遂に營邱に居を構へた。後ち進士に舉げられ、光祿丞になつた。儒を業として文辭に秀いて、且つ氣風超凡、磊落で、高邁の志を懷いて居つたが、才命の不遇より、情を清酒に放ち、興を畫に寄せた。されば、山水、煙澤、みな、胸中の不平を吐いて自ら煙を證つたのである。山水雲煙の千態萬狀を極め、而かも、用筆の秀潤、畫法の精致、造意經營みな、百代の師と稱せらるゝに足るものである。——（二二八〇）

リタイハク 李太白　**リハク**（李白）

リタクゴ 李卓吾　明の小說批評家。——（三〇八）

リダユー 清水理太夫　**ギダユー**（竹本義太夫）を見よ。

リタン 李端　中唐の詩人、大曆十才子の一——（二七八）

リチャードソン Samuel Richardson（一六八九—一七六一）イギリスの寫實小說家。デルビ州の指物師の子、家貧にしてロンドンの印刷所の徒弟となり、後印刷を業とした。生來書筒を綴るに妙を得て、其上性質が柔和であつたので、始終婦女子の社會に交つて、非艶書の代作を試みなどして、深く婦人の性質に通じた結果、教訓的通俗用文を綴る目的で、貞淑な田舍娘の性情を通した書簡體の小說 "Pamela"（一七四〇）を出した。實に作者が五十歲の處女作で、從來の冒險武俠の物語以外、平凡な家庭の出來事を平叙した寫實小說の先驅として、前代無比の歡迎を博した。其後篇 "Clarissa Harlow"（一七四八）"Sir Charles Grandison"（一七五四）の作あり。就中前作は最成熟した傑作と稱せられる。リチャードソンの晚年は信用篤き盛大な印刷所の主人として、幸福の中に世を去つた。彼の人物と著作は競爭者フイールヂングと好個の對映をなして、溫厚謹實、神經的で女性の內秘に通じてゐた。——（七四九）

リツザン 柴野栗山（一七三七—一八〇八）幕府の儒者、名は、邦彥、通稱は彥輔、說岐高松の人、著書に「國體」「栗山文集」「雜字類編」など——（一三九、一四〇）

リットン Bulwer Litton（一八〇五——三七）イギリスの小說家。ケムブリッヂの人である。幼いときから詩作に妙を得て、司法大臣の賞を得たことがある。後國會の議員となり、十年の間在職した、一八二五年男爵となり、殖民官（Colonial Secretary）となつて一八七三年に世を去つた。リットン卿は政治上より文學の上で一層著名である。既名で世に出した："Pelham"（1814）を初めとし、其次ぎの著名して公けにした："Pelham" も非常な好評であつた。以後四十年間に小說、物語、脚本を通じて數十篇の著作をした。人情物、古傳奇物、罪人小說、歷史小說等でこの外にシルレルの詩の飜譯などがある。——（七八九）

リッピ（フイリッピノ） Filippino Lippi（一四五七—一五〇四）イタリアフロレンス派の畫家。フイリッポ・リッピの子。ブランカッチ禮拜堂の壁畫に聖ペテロ聖パオロの事跡をかいたのが有名である。其他、フロレンスにある聖フランシスの幻、ボロニヤにある聖カザリンの婚禮等有名である。——（二三一四）

リッピ (フラア・フリッピ) Fra Filippo Lippi 一四〇六—六九) イタリア、フロレンスの畫家。魯通、フラ・リッポ・リッピ(Fra Lippo Lippi)と呼ばれる。色彩の調和と構圖の正確を以てあらはれた。その作中にはセント・ステファンやセント・ヨハネに關する壁畫が多い。大陸の大畫堂には大抵その作を見る。——(二三一四)

リッポ 野々日立圃 (一五九九—一六六九) 江戸初期の俳人、丹州保津の人、京師に出て、雖なひさぎ、書畫、連歌から俳諧に入つて遂に貞德門の秀といはれた。「嚏草」「往萬歲」「片輪車」「硯はいかい」等はその著の著しきもの「就中嚏草」は貞德の「御報」と共に俳諧の形式標準を綜合指示したものである。句風は一に纖巧優雅で、從つて深からず強からず、波瀾の少い生涯を之に托したのである。又「源氏物語」の梗概を綴つた「むさな源氏」がある。「天も花に醉るか雲の亂れ足」。寛文九年九月歿。(一七八)

リトー 李唐 宋代の畫家。字は晞古、河陽三城の人。宋の徽宗の朝、畫院に入つた山水人物を善くし、力を極めて李思訓の筆法を變へた。畫手にも秀いて居つた。宋南渡の後高宗の建年中成忠郎となり、畫院の待詔を授けられ、金帶を賜はる。時に八十に近いが、筆力益々壯、布置更に佳、南宋畫院第一の名手と謂はれた。劉松年、馬遠、夏珪みな及ばぬ。前唐の李思訓と並稱せられたのも所以なきでない。——(二二八一)

リドーゲン 廬道元 六朝後魏の文家。字は善長、范陽の人。——(二二八八)

リトーヨー 李東陽。明の詩人。李東陽、字は賓之、西涯と號した。茶陵の人で、幼にして神童の稱があり、天順八年進士の第に登つた。時に年十八。庶吉士に選ばれ、超遷を授けられ、累遷して侍讀學士に進み、弘治九年世に早歿があつたとき、上書して時政の得失を論じ、禮部右侍郎に擢でられた。後、太子太保禮部尚書兼文淵閣大學士に進み、歷ぼ上疏して匡諫し、劉健、謝遷等と並んで、賢相の稱を得た。武宗の天德元年、內官劉瑾の朝に入つて兵禮監となつたとき、東陽は、劉謝等と即日官を辭した。他は皆罷められたけれども、東陽ひとり許されず、再び上疏して辭したけれども、遂に留まるを得なかつた。その間に瑾の凶暴は日に〳〵甚しく、他の縉紳を抑壓し、東陽を陽に敬して、陰に忌彈した。けれども瑾の亂政は、東陽、私かに之れを彌縫し、また補政するところも多く、劉謝以下の人々、幾度か危禍に罹つたけれども、皆東陽の力爭によつて幸に事なきを得た。帝また嬉游を好み、出入度なく、奇觀を禁中に興しなどした、東陽は幾度も上疏して諫したけれども、採用されず、老病を以て前後數回、歸休を請ふの上書をなし、天德七年、遂に許された。後四年にして卒し、太師を贈り、謚して文正といふ。その著作には「懷麓堂集」がある。東陽は明代に於て、楊邱と並び稱せらるゝ二大詩人の一人である。その後に七子が嗣ぎ出た、茲には唯その名を並列して置く。七子とは李夢陽、何景明、徐禎卿、邊貢、康海、王九思、王廷相である、(九月渡江)「秋風江日龍鳴樯、遠客歸心正渺茫、萬古乾坤此江水、百年風物更東下、夜源登下宿維揚」——(三一六)

リハク 李白 (太白) (七〇一——七六二) 盛唐の詩人。字は太白、青蓮と號した。開四成紀の人とも言ひ、又は蜀の人とも、山東の人とも言ひ傳へる。少にして才氣人に秀れ、その志氣安放、超世の風があつた。はじめ峨山に隱れて居たが、益州長史蘇頲といふもの、太白を見て「この子英特、相如に比すべし」と言つた。後、天寶の年に長安で賀知章に逢つた時も、知章はその文を見て「子は謫仙人なり」と嘆じた。玄宗帝に言上して、金鑾殿に召して頌一篇を作らしめた。帝は太白に食を賜ふて、親ら調羹を作つた。詔して翰林院に供奉せしめた。けれども豪放なる太白は、なほ酒徒と共に市上に酒を飲んで居た。或る日帝が沈香亭にあつて、心に感ずるところあり、白を召して樂章を作らしめようとせられた。そして太白を召された。太白は既に醉ふて居る。左右のものは水を以て太白の面に灑ぎ、その醉の漸やく醒めるのを待つて筆を取らしめたところ、立地に清平調三章をなした。その文精妙か極めて、帝かして感嘆せしめ、帝は屢々太白を宴に召して詩賦を作らしめられた。處が太白は帝の側に侍するとき、醉へば必らず高力士に靴を脫せよと迫つた高力士は此の侮辱を烈しく感じて、其の詩の中から楊貴妃に關する個所を指摘し、楊貴妃を激怒せしめて、妃をして帝に太白の事を讒奏せしめた。偶ま帝が太白を官に用ゐんとしたけれども、楊貴妃は之を沮めた。太白は此時すでに親近のものに自分の容れられざる事を覺つて、帝に山に歸らん事を請ふた。帝はこれを許して、金を賜ふて、太白を放還した。太白の長安に留まつた事、實に僅に三年であつた。既に放還されてからは、久しく江湖に放浪して居た。此の放浪の間に、北海の高天師によつて、道籙を齊州の紫微宮に受けたといふ說がある。天寶十四年に安祿山が反した。其時太白は廬山に居つた。永王璘といふもの、江陵府の都督となつて、四道の節度使を兼ねて居た。太白の才氣を知つて居たから、用ゐて府の僚佐とした。後璘が亂を謀りて、その兵の敗れたとき、太白は捕へられて尋陽の獄に繫がれた。宣撫大使崔渙、御史中丞宋若思等は太白の罪の薄く、その才の用ふべきを言ふて、肅帝に之れを薦めた。太白此時すでに五十七歲。曾て太白の恩顧を受けた郭子儀は太白の罪を贖ひ、之れを夜郎に流した。太白は流されて洞庭に遊び、三峽に上り、巫

山に到つた、途中で赦に逢ふた。後、潯陽、江夏、蘄陽金陵等を過ぎて、檢人李陽の家を訪れ、此處で遂に卒した。(下江陵「朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還、兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山。」(遊洞庭湖)「洞庭西望楚江分、水盡南天不見雲、日落長沙秋色遠、不知何處吊湘君。」(送浩然)「故人西辭黃鶴樓、烟花三月下揚州、孤帆遠影碧空盡、唯見長江天際流。」(靜夜思)「牀前看月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故鄉。」(烏夜啼)「黃雲城　烏邊欲棲、歸飛噪々枝上啼、機中織錦秦川女、碧紗如煙隔窗語、停梭悵然憶遠人、獨宿空房淚雨。」——(二七四、二七五)

リハンリユー 李樂龍 (千鱗) 明、中期の詩人。號は千鱗。「唐詩選」の選者。——(三一八)

リヒテル (ジヤン・ポール) Johann paul Friedrich Richter (一七六三—一八二五)、魯通 Jean Paul といふ名で知れてゐる。ドイツの滑稽作者。バイロイトに近きウンシーデルに生る。始めルソー及びスキフト等に私淑し、諷刺物を試みたが成功しなかつたので轉じて滑稽作者となり(一七九三、Die unsichtbare Loge" に於て)、忽ちにして名をなした。一七九八年(—一八〇〇)アイマールを訪問し、女公アマリー及びヘルデル、ヴェーランド等に歡迎された。しかしゲーテとシルレルとは疑ひの眼を以て彼を見てゐた。其後ベルリン、マイニンゲン、コブルヒと居を移し、一八〇四年バイロイトに來り、死ぬまでこゝにとゞまつてゐた。主な作は——"Hesperus" (一七九五)、"Schulmeisterlein Wuz" "Quintus Fixlein" "Tolmul Hochzeit des Armenadvokaten Siebenkäs" (一七九六)、"Das Campanerthal" (一七九七)、"Titan" (一八〇〇—三)、"Vorschule der Aesthetik" (一八〇四)、"Flegeljahre" (一八〇四—五)、"Levana oder Erziehungslehre" (一八〇七)。——(九〇七)

リベラ Junopo de Ribera (一五八八—一六五六) イタリアイスパニア種の畫家、スパニオレットオ (Spagnoletto) と綽名された。アレンチアで生れて歿した。イタリアで教育をうけネープルスに在つてカラッチオの影響をうけネープルス派の立者となつた。多く殉教者を畫題として畫いた。寫實派で、その畫く人物は一種法悅の境地にゐる。——(二三三九)

リヘイ 清水理兵衛 淨瑠璃の名家。——(二二九、二一八二)

リボーヨー 李夢陽 (獻吉) (一四七二—一五二九) 明の詩人。字は獻吉、慶陽の人。——(三一七)

リミツ 李密 晉代の散文家。——(二六六)

リユーイン 劉因 元代の儒家。字は夢吉、保定容城の人。靜修と號す。——(三一〇)

リユーウシヤク 劉禹錫 (夢得) 中唐の詩人。(石頭城)(山園故國周遭在、潮打空城寂寞回、淡水東湯舊時月、夜深過女牆來」——(二七八)

リユーエイ 桃田柳榮 (一六四七—九八) 江戸初期狩野派の畫家。探幽の弟子。——(補)

リユーカイ 柳開 宋初の文家——(二八五)

リユーキヨー 劉勰 六朝、梁の修辭學者。字は彥和、東莞の人。後、出家して僧となり、鄧地といつた。——(二六八)

リユーキ 劉基 (伯溫) 明初の詩人——(三一二)

リユーキ 劉基 明初の文人。——(三一二)

リユーキユー 劉汲 金朝の文家。——(三〇〇)

リユーキン 劉筠 宋初の詩人、字は子儀——(二九二)

リユークワン 柳貫 元代の文家。——(三一〇)

リユーコン 劉混 東晉の詩人、字は越石、中山魏昌の人。——(二五九)

リユーコン 柳惲 六朝、梁の詩人——(二六二)

リユーシコー 柳子厚 リユーソーゲン (柳宗元)

リユーショー 劉邵 魏の文家、字は孔才、邯鄲の人。——(二六八)

リユーショー 劉向 漢の辭賦家、傳記家「列女傳」の作者。——(二五三)

リユーショー 劉崧 明朝の詩人。——(三一四)

リユータイクワイ 劉大櫆 清、乾隆朝の文人。字は耕南、海峯と號す。——(三三一)

リユータン 劉嗣 金朝の詩人。——(三〇〇)

リユーチユー 劉中 金朝の詩人。——(三〇一)

リユーチユークン 劉仲君 金朝の文家。——(三〇〇)

リユーチヨーケイ 劉長卿 中唐の詩人。字は文房、(過鄭山人所居)「寂々孤窓啼客鵑、寥々一犬吠桃源、落花芳草無尋處、萬壑千峯鎖閉門」——(二七八)

リユーテイ 劉楨 魏の詩人。建安七子の一——(二五七)

リユーテイシ 劉庭芝 (希夷) 初唐の詩人。——(二七一)

リユーソーゲン 柳宗元 (子厚) (七七三—八一九) 中唐の詩人。散文家。字は子厚、河東の人である。幼少の時よりして精敏、絕倫、嶷然として頭角を見はして居た。博學宏詞の科に及第して、集賢殿正學を授けられた。人格と學識と相俟つて、名聲一

時、朝野を震撼せしめた。貞元十九年、監察御史となつた。王叔文その才を喜んで、禮部員外に擢でゝ以て大に進用せんとしたが幾もなくして、叔文の敗るゝに遇ふて、坐せられて永州の司馬となつた。永州は僻遠荒瘠の地、子厚は感鬱の情に堪えず、山澤の間に放浪し、又閑居して書を讀み、此の間に文才詩思が湧發し人格を砥礪すること非常なものであつた。元和十年、柳州の刺史に遷された。世に子厚を以て柳柳州といふものは之れに依つてある。その時、友人劉禹錫も又播州に徙された。子厚友の爲めに泣いて曰く「播州は人の居るところにあらず、禹錫に親あり、母子俱に此の如き地に行くべからず」と、朝庭に聞ふて、柳を以て播に代えん事を請ふた。丁度その時禹錫の爲めに白すものがあつて、連州に改められた。その友に信厚なる實に斯の如きものがあつた。子厚の柳州に到つて地を治むるや、土人その人格を慕ふて、感化遠近に及んだ。その衡相以南の人にして、進士となるものは、皆子厚を以て師として居たゆゑに、その口譜指授を承けたものは、悉く法度の見るべきものがあつたといふ。元和十四年十一月を以て柳州に卒した。年四十七。その翌十五年七月十日、興禍京師に歸るを得て、萬年懸外先人の墓の側に葬つた。子厚は眞に絶世の天才、猶ほ文人としては年少くして死した。惜むべきである。——（漁翁）「漁翁夜傍西巖宿、曉汲清湘燃楚竹、烟消日出不見人、欸乃一聲山水綠。（廻看天際下中流、巖上無心雲相逐。）」——（二七八、二八二）

リユード Emugois Rude（一七八四—一八五五）フランスの彫刻家。ディジョンで生れてパリーで歿した。アリュッセル及びスリーに製作を殘した。古典派より寫實派へうつる過渡を代表する作家で、パリー凱旋門にある "La Marseillaise" の浮彫は最有名である。——（二五〇四）

リユーリキヨー 柳里恭　キエン（柳澤淇園）

リユカヌス Annaeus Lucanus（前三九—六五）ローマの詩人。——（四八六）

リユツケルト Friedrich Rückert,（一七八八—一八六六）ドイツの詩人で、又東洋語學者である。シュヴインフルトに生れた。一八一五年新聞記者としてスツットガルトにとゞまり、一〇七年イタリア旅行の途に上つた。一八二六年エルランゲンの東洋語學校教授に任せられ、四一年ベルリンの大學教授に榮轉した。こゝでマクスミユラーを弟子に持つた。一八四八年辭職。彼は最初愛國的の歌、例へば "Gebrnisiuhlo. Sonette." "Spott und Eurobilder" （一八一四年に出した）—で知られた。彼は又多くの好抒情詩を作り、一八四四年 "Liebesfrühling" として出版した。東洋文學の飜譯では—ハリリの "Abu Zeid フィールドーシの "Shah-Nameh" 抜萃など。——（九一八）

リヨー 龍

リヨーイ 淺井了意（一六四〇—一七〇九）江戸初期の著作家。京都の人、字は子石松雲、又飄水子と號した。「東海道名所記」「お伽ほうこ」「犬張子」「本朝女鑑」「曾呂利狂歌咄」「浮世物語」等の著作を殘した。淺香山井著と名のある「徒然艸諸抄大成」も其作である。——（一四五）

リヨーエン 慶燕（柴舟）清　初の文章家。號は柴舟「廿七松文集」の作あり。——（三一二四）

リヨーガ 託壁其賀　鎌倉初期の畫家。——（二二七六）

リヨーカイ 梁楷　南宋の畫家。東平相蔡の後で、よく山水、人物、鬼神、道釋を描いた。畫風は冥師古より出でゝ、非常に飄逸な描寫をした。南宋の寧宗の嘉泰年中に、畫院の待詔となり、金帶を賜はつた、

が、それを受けず院内に柱げて去つた。性酒を友とし、能墨の技を娯しんで、自ら梁風子といつた。畫院の人々も、楷の畫の精妙な能致を見て、敬服しないものはない。——（二二八一）

リヨーサイシユー 慶柴舟　リヨーエン（慶燕）

リヨータ 大島蓼太（一七〇八—一〇八七）江戸中期の俳人、雪門一派の祖風雪より第三世の雪中庵を繼いだ人。江戸の人で、名を平八といふ。自隆禪師について悟得し、學殖淺からず、俳諧は更登に學んだ。著述六十餘部。有名な「五月雨やある夜ひそかに松の月」によつて、始めて支那の人に、俳諧を知らしめたといふ話がある。天明七年九月歿、年七十。「閻田刈て水鶏に遠き蘇堤哉」「絶々に溫泉の古路や苔の花」「傾城の市にかくれて頭巾かな」。——（一九四）

リヨート 岩田涼菟（一七一七）江戸中期の俳人。伊勢山田の祠官で、俳風は守武の風を慕ひ又芭蕉を師とした。「朝露や廊下をのぼる人のこゑ」。——（一八六）

リリツオー 李陵

リリヨー 李陵　前漢の詩人、字は少卿、漢の將校として匈奴を伐ち、敗れて降り遂に匈奴の臣となつた。同じく匈奴に囚えられた親友の蘇武の歸國に臨み、互に天涯生別の愁思を寄せた「贈答」の詩は漢代五言詩の先を爲した。——（二五〇）

リーギウス Titus Livius（前五九—後一八）ローマの史家。——（四八五）

リンガイ 廣瀬林外（一八三五—一八七四）漢詩人。名は孝。豐後の人。——（一四一）

リンコー 林鴻　明朝の詩人。——（三一四）

リンザエモン 柴崎林左衛門　大阪の俳優。——（一七三九）

リンチユー 常盤津林中　常盤津節の名家。——（二一四二）

ル

ルーソー Jean Jaquo Rousseau（一七一二—一七八）フランスの哲學者。セネヴの時計屋の兒であつた。生れた町を逃れてアーレンス夫人のもとにゆき、一七四〇年迄すんでゐた。四一年 "Narcisse" といふ喜劇を携へ音樂上の新意見を以てパリーへ出たが、どちらも成功しなかつた。が、勢力のある友人が出來て、エニスのフランス大使館の秘書となつて二年許暮し、パリーへ歸つて、オルレアンの少女、テレース・ル・ヴアスールと恩愛になつて、五子を擧げたが、皆之れを養育院へ送つた。彼の文學的成功は一七五〇年、科學藝術の進歩が道德に對する影響を論じて、學士院の賞與を得た時に始まる、五三年にはオペラ "Le Devin de Village" また論文 "Discours sur l'inegalité parmiq les Hommes" をかき、六二年には "Emile" "Contrat de l'Education" がなつて、セシュイット教徒に道はれてスキッツルからイギリスに逃れヒュームの客となつたが、後フランスへ歸るを許されて、エルムノンヴォーユで歿した。イギリスに居るとき、有名な Boutfussions をかりて自傳を發表した。彼の作物は箸句にとみ、一見深遠な眞理を語るやうに見えるが、多くの場合、誇張と空虛の言にすぎず、彼の力は、その文體にある。彼は非凡の發表法を有し、その言葉は日光の如く容易で、單純で、明晰である。サントベウが彼を以てフランス散文界の革命者とするも無理はない。——（五五六—五五八）

ルーソー Pierre Etienne Théodoro Rousseun（一八一二—六七）フランスの風景畫家。パリーで生れバルビゾンで歿した。有名なフォンテンブロー派の唱首で近世フランス風景畫の父と言はれる。その作を初めてサロンへ出品したのは一八三四年。一度、ルーソーの畫の一つをサロンで陳列しなかつたので、兩者の間に隙を生じ其後、ルソーはサロンへ出品しなかつた。が、一八四八年頃から、反動が起きて、彼の作が愛重されるやうになつた。ルーヴルにフォンテンブローの「日没」「夕」等の名作を藏する。

ルーベンス Peter Paul Rubens（一五七七—一六四〇）フレミッシ派の畫家、ドイツのナッサウ（Nassau）のジーゲン（Siegen）に生れた。彼の樂觀的の外見と色彩に對する鋭い感覺とはエニス派の諸家を思はしめる。二十八の時、既に、アントワープ組合の畫家の棟頭であつた。マンツア侯に仕ふること八年、此間、チ、アノやミケルアンゼロ等を學んだ。一六〇八年、ネーザーランド知事の顧問家となり一六二〇年にはパリーを訪ふた。イスパニアに使した時エラスチスに會ひ、八ケ月間共に旅行し、共に畫いた。翌年英國へ使し、チャーレス一世の嘱に應じて、大廣間を飾つた。彼は、剛いまでに力ある筆で、豐富なる生、豐富なる肉を描いた。その宗教畫の中では、「十字架より キリストを下ろす」「聖アンツオン（Antwon）の戰」「聖保羅畫伝」「四哲人」「聖母の園」などが最も代表的のもので、その動物畫は、ウサナ、ベルリン、ドレスデン、ミューニヒ、景色畫は、バッキンガム、ウィンザル等の宮殿に見られる。イスパニアから道ほ、フランドル（通ずる。フランドルは十七世紀にはイスパニアの屬領であつた。此國では宗教戰爭、特に激しく行はれ。北方に於けるジュシュイット教派の城地の形をなしてイスパニア朝廷の支配下にあつた。されば、ともすると此國の藝術はイスパニアのそれに似てゐるだらうと思はれるが事實はその反對である。寺院も、イスパニアのやうに陰鬱な神秘な影が漂ふてゐるのでなく、堂々たる伽藍に金色燦爛として眼を射る。彼方には、暗い靑色も、こゝでは、深紅の色が、閃くやうに凱歌を奏してゐる。宗教改革反動期の始まつた頃には、畫家は、神の怒りを恐れて裸體をかくのを禁じられ、ミケランゼロの「最後の審判」に見える性を沒したやうな裸體ですら中て蔽はれたが、此國の畫派になると生命は裸體畫にありといつてよろしい。その裸體も肥えて軟かい。かくて、その初期には文藝復興とは反對の傾向を追うた宗教改革反動運動も、後期になつては、却て、文藝復興期の含むギリシア精神をとり入れて來た。而して、此時、文藝復興期の遺産を繼承したのは、ルーベンスであつた。彼の畫風は、ギルランダヨすや、ラファエルのやうに一般的である、新問題を解決しやうとするのでもなく、己れの精神を昔自せんとするでもない。畫家エロネセと共に文藝復興期は去り、ムリリヨと共に宗教改革反動期は去つた。この離れて立つ二つの時代を統合せんとしたのがルーベンスの努力で且功業であつた。宗教改革反動期は肉慾に抗する決果、不自然の訪あるまでに靈的となつた。これをルーベンスは健全なギリシアの肉慾主義へ引き戻した。彼はスペインの靈的畫派の反動といつてよい。彼が動物的情慾、獅子、虎、豹、熊、猥等に見える動物的情慾を描かんとしたのは決して偶然でない。彼自ら、美ほしき力ある動物の概あつて、當時の家畫の中にあつては、牝馬群における一牡馬であつた。克己をかゝずして、情慾を描き、靈の悅に行かずして、肉の力に走つた。ルーヴルにある彼の作、「祭」（Kirmess）では、男も女も、居酒屋の戸の前でなく、廣い野原で、酒宴をしてゐる。小休みなき舞踊の中に、一人は腕を女の身に投げてゐる。また一人は、その肥抱を空にさし上げてゐる。三番目のは、女を抱き

締めて、腕となく、脚となく、胸となく、唇となく、互に身を押しつけてるかと思へば、今一人は、作の女を池へ倒してゐる。別の畫でこれ程、ひどくないのがあるが、題目は、やはり、戀。女人の立像の胸から泉が噴いて、其前に男女の一群が座つてゐる。二人の踊り手が踊る身構をしてると、若い男が笛を吹いてる、そこに美しい女が近いてくる、その頭の上を天使が翔けてゐる。此二畫は、ルーベンスの代表的作品といつてよろしい。フランダーの人々は聖人を描くにもこれを自己の如くあらはすを欲した。ルーベンスの活動は繪畫のあらゆる方面——宗教、神話、風景、肖像、動物——に渉つたけれど皆、一つ神で繋がれる、吸い血、火のやうな肉慾が、何れにも、脈打つてる。長い間、ヒステリー的の憧憬に疲れたあとで、吸かい活々した肉を抱きたいといふのは、人皆の願であつた。表面的の蒸巽こそあれ、何の畫も根底に於ては肉の渴仰に他ならなかつた。キリスト教精神が全く他の反面に走つて了つて、昔の、肉の苦行をするといふ教理すらも、圖抜けて大きな身體でかきあらはされた。舊約聖書から畫題をとるにしても「スザンナの浴」とか「サムソンの囚はれ」とか、妖艶な女人の體軀や、戰鬪殺戮の荒々しさでその風のやうな感情を悅ばし得るものを撰んだ。彼が二百八十の神話畫を作つて、ホーマー、ヴージル、プルターク。リヰーの扱つた題目を殆ど描き盡したのも、強い健かな婦人の裸體像や、力ある、風のやうな運動をえがく機會を捕へんがためであつた。文藝復興期に於ける如き、寧靜の姿にある女神を畫くことは彼には思ひもよらぬことであつた。彼のヴェナスは、濃艷な肉體が、情慾に輝くときの姿にあらはされた。彼の寓意畫は、その神話畫と題目の相違丈しかない。世界の四部が、「愛」に統率されて座つてゐるそのまばりな、おある運命や、鐵の裝飾などが圍んでゐる。彼はまた、「メヂチのマリアの一生」(Life of Maria de'Medici)などの歴史畫をかいたが、これなどは同時に人間の肉の讃美になつてゐる。彼の風景畫もまた此傾向を取るもので、牡牛が肥えた彫れた乳房から乳をしぼられてる處や、雨のあと、風のあと、何處にも露が光つて、樹々が活々としてゐる處などなかく。情熱、豐饒、希望、休安、これらが彼の題目である。彼の肖像畫を畫ふときは、誰も、先づ、ヘレーネ・フールマン(Herene Fourmont)を思ひ出す。十六歳にして五十三歳の此老畫家に嫁いだ美人を思ひ出す。彼が、自分の妻にあるやうな婦人を愛つたといふことは、やがて、彼の婦人の肖像が、皆「レーネ型」だといふことになる。我々は、ルーベンスの描いたこれらの感壁に動物の如く醉ふにはあまりに弱い、健ない、只々、靈かるゝのみである。が、押しつけたやうな、固ばつた愛のあとには、こんな剛い肉慾が來るといふことはわかる。ルーベンス自身、その心中、この活力に富んでゐたといふことは、その畫室の戸に「健康なる精神は健康なる身體に宿る」とかきつけておいたのでも知れる。(ムーテル著「繪畫史」)

ルサージ Alain Rene Sage (一六六八—一七四七) フランスの小說家。ブリタニーのサルツォーで生れ、パリーへ行つて法律を學び辯護士となつた。彼は近代的の文士としてフランスでは最初の人といはるべきであつたらう。

ルナン Ernest Renan (一八二三——九二) フランスの散文家ブリタニーの海邊、トレギエで生れ、初め僧たらんと志したが、宗教上の疑惑から、ローマの教會を去つた。一八六〇年にはシリアを旅行してキリスト傳の材料を集め、六二年にはフランス大學でヘブリュー文學の講座を持たうとしたが學生反抗によつて果さず、八〇年にはイギリスでブリュー文學の講演をした。彼はキリストを目するに、一哲學者を以てした諸聖徒に對する見解も亦之に準ずる。——(六三〇)

ルメートル Jules Lemaître (一八五三) フランスの詩人、批評家、劇作者。ヴェネレイに生れた。ケレノゾルで教授もしてゐたが、しばらくで止して專ら、文筆に從つた。——(六三五)

レ

レートン Frederik Leighton (一八三〇—九六) イギリスの歴史、風俗、肖像畫家、彫刻家。初めて陳列したときが一八五五年、二十五歳のとき。七六年には貴族に列せられ、ロンドン、アカデミーの長となり、時代の寵好を得た。——(二三六一)

レオナルドオ・ダ・ヴィンチ Leonardo da Vinci (一四五二—一五一九) イタリア畫家、彫刻家、建築家。——(二三三六)

レオパルディ Giacomo Leopardi (一四九八—一八三七) イタリアの詩人。——(五二〇)

レイトク 鶴冠井令德　江戸初期、貞德門の俳人。「馬合羽雪打拂ふ袖もなし」——(一七八)

レイガク 厲鶚　清、康熙朝末の詩人、著作に「樊榭山房集」——(二三二一)

レイノルヅ Sir Joshua Reynolds (一七二三—九二) イギリスの肖像畫家。王室文藝院(Royal Academy)の最初の總裁で、一七六九年には子爵に叙せられ八七年にジョージ三世の宮廷畫家となつた。デヴォンシャヤのプリムトン(Plimpton)に生れ當時隨一の肖像畫家ハドソンに就て學んだ。四九年には、ゲッベル提督に隨つてイタリアに遊び、ミノルカで肖像畫をかきローマに二年を費しフロレンス、ヴェニス其他藝術の中心を訪ふて歸來ロンドンに住し貴人の委囑に應じ

た。その廣い交友の中にはバーク、ジョンソン、ゴールドスミス、ホガース、ガーリック等があつた。七七年マルボロー家の肖像を畫き、七九年にオクスフォード新大學の窓の裝飾を假粧した。八一年八三年にはネザーランドを訪ふて、その時の書簡は、ロイヤルアカデミーの學生に與ふる書と共に公刊された。八四年にその傑作「悲劇の女神としてのシッドンス夫人」が出た。が八九年には視力を失つて、刷毛を拇つの止むを得ざるに至つた。墓はセント・ポール寺にある。彼は、子供を畫いて特に得意で、ウキリアムゴルドン卿の嬢フランセス・イサベラをモデルとして五人の天使を作つたなどはその特色をよくあらはしてゐるものである。ロンドン、エディンバラ、ダブリン、グラスゴー、リヴァール、バーミンガム、マンチエスター、オクスフォード其他至る處で彼の畫は見られる。——(二三五八)

レツギヨコー 列禦寇(列子)　戰國の哲學者——(二四一)

レツシング Gotthold Ephraim Lessing (一七二九—八一) ドイツ批評家、戲曲家。オベルラウツツのカメンツに生る。父はそこの牧師長であつた。神學研究の目的でライプチヒ大學に入り(一七四六)文學と哲學を研究す。四八年ベルリンに出て原稿生活を送る。五二年ヴイツテンベルヒに行つて學位を取り、それから再びベルリンへ歸り、英文學、ラテン文學を研究する、五四年 "Vadenecum für den Herrn S. G. Lange" を著し、批評家としての大才を示す。翌年 "Miss Sara Sampson" 出づ。ライプチヒに滯在中クライストと相知り、愛國的戲曲 "Philotas" を書く。一七五八年より六〇年まで三度ベルリンに居を卜し、"Briefe die neueste Litteratur betreffend" 及び "Abhandlung über Fabel" "Fabeln" の著あり。六〇年プレスラウの太守タウエンチーン將軍の秘書官となる(一五六)。六六年 "Laokoon" 六七年 "Minna von Barnhelm" 之はドイツ喜劇中の白眉とせられてゐる。"Hamburgische Dramaturgie" (一七六八—九) は、ハンブルヒの劇場監督をしてゐた間の著である。彼の古典的智識を知らんとせば "Briefe antiquarischen Inhalts" (一七六八) あり、"Wie die Alter den Tod gebildet" がある。七〇年ブルンスヴイック侯の圖書掛としてヴオルフエンビッテル(行つた。"Emilia Galotti" (一七七二) 及び "Fug menschen zu einer Ungemunten Ein Wort zu Hrn. Pastor Goze" (一七七九)。"Die Erziehung des menschen geschlechts" (一七八〇)。參考書として は "Briefe von und an G. E. Lessing" (五卷、一九〇四、Munchen 編)、"Lessing als Reformer für die Deutschen Litteratur" (一八八一 Fischer著)——(八九七、八九四)

ラオコーン (Laokoon) (一七六六年) レッシングがラオコーンの論文の第一冊は一七六六年即ち氏が三十八歳恰も齡に一度ベルリンを去りてプレスラウに放縱の生活を送つた後再びベルリンに歸つた翌年に刊行せられたのである、而して氏は當初第二冊以下を續いて刊行する考であつたが、萬般の事情の爲に妨げられて、之れを果す機會を失ひ前記の第一冊のみが現在世に喧傳せられてゐる。ラオコーンの原書は僅々百八十餘頁の小冊子であつて全部二十九編より成つて居る、而して本書はラオコーンと題するも、其は本書の議論の端緒が、有名なる觀像ラオコーンの群像に就て開かれたが爲であつて全編の趣旨はレッシングが自家の見たる造型美術即繪畫彫刻の類と無形美術即ち詩との限界本領の異同を論じて、之れに關する當時有力なる諸家の說を辯駁して氏自身の主張を發揮したものである、抑もラオコーン群像は昔トロイが希臘軍の圍を受くること十年一度籠城の苦を脫するや民は神恩を謝せんとて祭司ラオコーンをして司祭せしめた、ラオコーンは二人の子と共に祭壇前に到るや、故ありて神の怒に觸れ二頭の毒蛇忽來りて三人を捲き、次子は已に息絶へんとし、父は身體の苦痛に堪へず、長子は恐れ慄ける三者異れる度合にある苦痛の一瞬間を彫塑の王に現したものである。(四洋彫刻史參照詩人ヴージルの歌へるラオコーンと彫塑のラオコーンとの關係に就ては、或は美術家がヴージルに據つて此集像を作つたと主張する人あり、反之ヴージルは此集像を模擬してラオコーンを詠じたのであるとの說がある、レッシングは本書に於て、前者の說に贊し美術家は詩によりて造型美術を作るに際し、能く採るべきを採り、避くべきを避けて居る、反之詩人が美術を粉本とせしならば、現在見る如き彫塑のラオコーンと詩の非れとの共通點の少きは解しがたき處であつて、殊に著しく彫塑と異れけ狀態を詠へる詩人の意を、解し得ないのである、とて後者の說を排して居る、元來造型美術と詩とは其領域に差別があつて、造型美術を以ては到底表現し得ない狀態も詩を以てせば敢て難事では無い、又前者に於ては避くべき醜惡の狀態も後者に在つては前後の關係上見る者に美感を與ふることを得るのである、彫刻繪畫等は美を最上法則とすべきものであるから苟くも醜穢嫌惡の念を誘起するものは他逕之れを避くべきである併し詩の天地は自由である、造型美術即繪畫彫刻等の領域は狹く、詩的描寫の境は自由にして廣く、其間大なる差別ありと言ふが、レッシングの限界論の要點であつて、亦此のラオコーン論一部に渉つた趣意である、されば近代の藝術鑑賞家として名あるヴンケルマンの評論に對して、レッシングは反對の意

見を抱いて、彼れが詩と彫塑との領域を同一視したる見地からして、此のラオコーン像に關して、ゲーテルに加へた批難を主として反駁したのである、凡そ古代の造型藝術に在つては喚叫苦悶の如き醜惡の狀態は、美を生命とする點から避くべき必要があつたのである、故にラオコーン集像に於て、技術者が喚叫の狀を描寫せなかつたのは、ウインケルマンの說く如く偉大なる精神に適はしめんが爲ては無く、造型藝術として斯くせなければならぬ故である、從つて自由の領域を有する詩人ゲーテルが喚叫の聲を寫したるも敢て咎むべきでは無い、以上は本編第六章までの大意であるが、第七章乃至第十章に於てはエゲソン及びスペンスの說を謬誤として說破して居る詩人が歌ひ出す錦繡の字句の源泉を一々技術者の作品の上に求めむとする一派の說がある、英國に於ける藝術鑑賞家として榮名を博したエゲリン、スペンスの如き其好代表者である、されど詩人と技術者とは共に藝術家として其着眼點の例一に歸することは有り得べきである、然るに之れを以て悉く一方が他方をコピーしたものとするのは極めて偏狹なる考と言はなければならぬ、且つスペンスは繪畫と詩とは共に同一材料を同等に描寫し得るものと考へ居たる結果、古代藝術に於て詩人と技術者との間に作品上些少の相容れざる點ある時は、之れを解するに苦しみ其結果種々牽强附會の說を立てたのである、殊にスペンスが古代或時期の技術には何れも宗教上の束縛が加へられて居ることを閑却せしは、彼れの論旨の偏狹に陷る一要素であつて、レッシングは此點に於てもスペンスの謬見を痛論し、宗教の羈絆を離れたる技術にあらずんば、眞の藝術的作品では無いとの考が現れて居る、尙一つのスペンスに對してレッシング論を加へたる點は、繪畫に於て描寫し得る事象で無くば詩人は詠ふべきものでないとの偏見である、是はレ氏の所謂 Allegorisches Attribut と Poetisches attribut との區別を無視したるものであつて前者は技術の必要上用ひらるゝ處の譬喩的の記號であつて、更に巧き描寫の方法として後者の Attribut を有する詩人と同一視し强いて詩人をして技術者の爲す處に倣はしめむと要求する必要は無いのである、レ氏は第十一章以下に於てゲーリュス伯の說には反對して居る、エゲリン、スペンス等とは趣を異にせるゲーリュス伯は、技術者をして範をホーマーの詩中に求めしめんとしたのである、されど試みに思ふに、技術者は其意匠を詩人に藉り得べきも、詩人が意匠を技術者に藉りたる作品は全く無價値となるのである、是れなレ氏は技術上の Die Enfindung は困難である、詩は容易にして Die Darstellung は困難である故に難き Die Erfindun を技術者は全く之れに反する故に難き Die Erfindun を技術家に仰いだ作品は價を失ふものだと說破して居る斯く技術者と詩人との材料は同一共用すべきものでは無い、殊に繪畫の題は徒らに新奇雜解のものを撰ぶべきでは無い、とてレ氏當時に在りては未だ充分世に紹介せられて居らないホーマーの詩中に畫題を求めんとしたるゲーリュス伯の意見に反對したのである是れレ氏の畫題論の一班である今日の如くホーマーが一般に流布せし場合ならば、レ氏も必しもホーマーの詩中に求むることを排斥せなかつたものであらうが、立論の主旨は奇拔未知の畫題を嫌つたのである、レ氏は論鋒を進めて、詩に描寫された畫題 Das poetische Gemälde と技術者の表現した繪畫 Materielle Gemälde との戶本的區別を述べて、前者必しも後者の粉本とならざることを說破して居る、彼れが詩畫論の中堅に於て氏は其自說を主張して居る。凡そ繪畫は時間的連續的の音聲言語を以て或事象の行爲を表現し、繪畫は空間的廣袤的の色彩形狀を以て或事象を表現するを以て各其の本領とするのである、然かもあらゆる事象は時間的空間的の二面に關聯するものであるから、繪畫も行爲の或一瞬間を形體に依りて表現し、詩も形體の一部を行爲として撰ぶべきは最も內容に富み、前後の行爲に關聯する中樞鍵で無くてはならぬ、詩が形體を描寫せんとするには最も其形體に對して正確明瞭なる觀念を與ふるので無ければならぬ。故に詩に於て精細なる繪畫的描寫は其本領に背くものであつて、繪畫的描寫の詩が詩其想像を防止する例少なからず、レ氏はホアマーのアヒレスの楯の記事を以て繪畫的描寫にあらずとして賞讃して居つたのである、而もホーマーは形體美を表現すること頗巧妙であつて、詩人の範を此處に求むべきものである、加かも一面畫家に對しても又模範となつた、併しゲーリュス伯の見る如き意味では無論無い、ホーマーは醜の分子を巧みに詩中に應用したが是は詩に限ることであつて美術としての繪畫には決して用ゆべきでない、嫌惡も亦詩にのみ限る材であつて繪畫の領域に入るべきではないとレ氏は論じて居る。以上大略ラオコーン論の一端を紹介したのであるが、此論に就ては諸家褒貶の筆頭を盛んであるが、詩聖ゲーテはレ氏の詩畫極限論を以て斯道の迷暗を破る一閃の電光にして萬象明々照破せらるゝの効ありと激賞して居る、一世の大哲學者ヴィルフルムゲント亦精察周到なる眼光を以て、レ氏の批評方法の秀逸銳利なることを賞讃して居る、要するにレッシングはラオコーン集像の技術者を以て能く美の原則を拳じて誤らざるものと認め同一瞬間に於ける苦痛の三階級を現すに當り眼りに苦痛の極限に達せる瞬間を撰ばずして瞬間を

觀者に想像の餘地を與へたるは所謂最も內容に富みたる中樞想を撰みたるものであつて、技術者の應に撰ぶべき點を撰びたるものとして、一面詩人ゲーテルが其喚叫の狀を描寫し集像に在りて僅に脚部のみを纏れる蛇身が全身を幾層に緊縛せる如く詠へるも亦彫刻の本領と異れる詩の其れの然らしむる處であつて正當の描寫であると說明して居る、是が本論の根底思想である。——(八九七)

レナウ Nikolaus Lenau (一八〇二—五〇) は Nikolaus Niemsch von Strehlenau の雅號である。ハンガリーの詩人。クツアタッドに生る、世を厭ふて、アメリカに渡り、さて平和の地を出見さんとしたが、一八三三年失望して歸つた。それからギエンナに住み、後スツットガルトに移り、こゝでシュヴビア派 (Schwäbischer Dichter Heis) の詩人連と交つた。彼の詩は憂鬱の結晶で、不思議な幻想や、淚とした憧れに充ちてゐる。抒情詩「畸形詩集」(Schilfieder 一八三五) 叙事詩「ファウスト」(Faust 一八三六) サヴオナロラ (Savonarola 一八三七) 「デイ・アルビゲンセル」(Die Albigenser 一八四二)——(九二三)

レニ Guido Reni (一五七一—一六四二) イタリアの畫家。カラッチの弟子で、一六〇二年ローマに行つた。こゝで、その大作なるロスピグリオシ宮の壁畫をかいた。——(二三三四)

レムブラント Harmensz Rijn Rembrandt (一六〇六—六九) オランダ派の大畫家。ライデン (Leyden) で生れた。一六二四年には、故郷で、フランス、ハルスのに似通つた、自己流の大膽な研究の製作を始めた。鋭い洞察力を持つた寫實派の人で、人間の內的生活に直覺的な同情を以てゐた。小作人でも、乞食でも皆題にとつた。彼の畫はオランダ、イギリスに多く見られる。プリチッシュ博物館は、エッチングの作品が多く保存されてゐる。彼の技巧の唯一の秘密は、撰擇せる事實を强めて、ゆがめない處にある。そして、そのために、事物の表面に横はる神秘を暗示するやうな風に色の濃淡の具合を加減した。レートン卿の言葉を借りれば、彼は世に漂明の詩と陰暗の神秘とを示した、すぐれた畫家であつた。彼の技巧に關してミレー (Millinie) は記して曰ふ、レムブラントはその初期には細末にも極めて注意し肉の畫に默釋の跡もあるが、技熟しては、こんな纖巧な處は消えて了つて、かき方が廣く安らかになつて來たと。彼が光線と影との畫家たるを以て北ドイツ的宗教畫を創始したのを以て、大なりとするのは未だ當らない。彼は、科學の解釋力と歷史の解剖以外に超然たる、殆ど唯一のハムレッド的藝術家である。文藝復興期から支配したギリシア精神の明晰と整正とはレムブラントの暗い感傷に對象を見出す。彼が文藝復興期の諸家に對するに、尙「オシアン」のホーマーに對してニーベルンゲがオリンピアの神族に對する如きものである。レムブラントに近づく唯一の方法は彼の作を以て畫とせず、心理學的記錄とするのにあるかもしれない。これ彼の最も大なる特性である。彼は、近代の意味で、最も早く自己の思想をあらはさんとした畫家である。彼の內性を動かした情緒がやがて彼が布にあらはした處のものであつた。彼は人の聞くを思はない。只、自分で活きてゐる。彼は他人に理解されないのを憂へぬ。自己の感情、氣持を出し得ぬのを懼れた。畫家でない、人間として彼は語る。彼が何を、如何に創つたかは彼の生涯の歷史と對比して始めて知れる。彼がアムステルダムに來るや、女はその思想の中心であつた。婦人研究の計畫は緩々遂行されたが、半は、粗い感覺的のものであつた。が、直に「フランスの雛床」(De lit Français) のやうな性欲を性質の間の不斷の葛藤であつた。感覺的な人間が世間へ沈み込まうとする願と、求めて得ざる夢見る人を尊む念との軋轢であつた。彼れの興味の多く婦人にかゝつたことは事實である。「フランスの寢床」では、女の醜を暴露して、女に對する情熱を抑へんとしたとも見える。が、遂に、その家婦の姿態に安心するに及んで婦人に對する哀愁と欲望とはきえて、再び幸福に家庭の和樂を味はうた。此頃が彼の一番働いた時である。要をモデルにした畫も澤山出來た。淫書から取つた畫題も少くない。一六五六年彼が財政上の打擊をうけて零丁の身となるや畫風もまた變つて來た。昔の華美な調和した畫は冷たい嚴肅な色を帶びて來た。彼の終作は「キリストの磔刑」であつた。一六六九年十月八日、チトスで歿した迄の六十四年の生涯は、運命の悲劇、最初の近代藝術家の悲劇であつた。(二三四九、二三九〇)

レルモントフ (一八一一—一八四一) Michail Gurievitch Liermontoff ロシアの詩人、小說家。モスコーに生る。貴族の子で天性酷だバイロンに似て居た。彼の傳は詳かには知られて居ないが現に角幼時は幸福に過したらしい。僅かに三歲の彼を殘して世を先立つた彼の母は熱心なる詩歌の愛好家であつた。彼は實に母の血からその詩才を享けた。十六歲の時モスコー大學に入つたが翌年其一教師と抗論して放校せられ、ポントピータースブルラの陸軍士官學校に二年を送つた。彼の初期の叙詩「ペテロフとウーランシャの節會」(The Fête at Peterhoof and Oulunchu) は此頃(一八三二—一八三四)の作である。かの形式のバイロンに似て居るといはるゝ「ハツヂアブレク」(Syadi-ureck) を出した時は彼は騎隊の一下級士官に過ぎなかつた。一八三七年當時二十二歲の青年なりし彼は「プーシキンを悼む」(On Pouschkin's Death) と題する一篇の詩を出し一朝忽ち一世を靡倒した。風靡を蒙れると

共に社會に對する不滿の念反抗の情をすく烈しくなつた彼は一度は一八三七年その無理なる詩の爲めに一度は一八四〇年仰の某貴族の子との戀の爲めに前後二度までもコーカサスは配流の身となつた。レルモントフも彼と同時なる調子に屬するものはなからう。けれども配所コーカサスのはてしなき森林廣野の美は彼に「コーカサスの詩人」の異名を與へるまでに彼を養ふに不足はなかつた。一八三八年彼は「惡魔」(TheDemon)「イヴン・ヴァシリエヴィッチの歌」(Song on Ivan Vassilievitch)を作りてモントベテルアルカに新つた。彼の自傳と稱せらるゝ小說「現代の英物」——(a Hero of our Own Time)はその二十五歲の作である。年を經て配所の流謫から解つて間もなく、非の同僚と決鬪して果てた。戲曲に三十。彼には亦悲劇「イスマニアン」(Isranisy)一八三〇)「假面舞踏」(The Masquerade)一八三五)などもある。——(一〇二七)

レンキヨー　幾行　幾分時代の詩家。——(二三七六)

レンバッハ　Franz Lembach(一八三六—一九〇四)ドイツの肖像畫家。一八五六年の「牧場」並に五六年の「國民けうの戰矢」に對賞派のために過を問いた。その畫布に收められた人に「ビスマルク」「クラドストーン」「ムルケル」「ハイネ」等がある。——(二三五五)

ロ

ローエル　James Russell Lowell.(一八一九—一八九一)アメリカの詩人、北新聲クムブリッヂに生れ非所で死んだ。一八三八年ハーバード大學を卒業して二年後切非の職に就いたが彼自身の希望は學の文學者に在つた。一八四一年第一の詩集を出版して以來政治問題にも容喙して詩歌文章を作いたがまだ世きを成すには到り無かつた。一八四八年に出版した詩三篇は一躍大家の堂に上らしめた。「チャー・ウォンスチール」の幻」(The Vision of Sir Launfal)「批評家物語」(The Fable for Critics)"Biglow Papers"である。一八五一年及び一八五五年の兩度に歐洲を巡遊して歸來ハーバード大學の講座を擔任した。一八六三年以後十年間 The North Amerisan Review"に執筆した。當時の論文非他は三卷の書と成つて出版されてある。一八七七年にはスペインに使した。先是彼は南北戰爭の間に作つて"Biglow Papers"の續篇を公にし、一八六五年には「追悼の歌」(The CommemorationOde)を出して世を驚嘆の調子を以て、引續いて出版された「柳樹下にて」「戰爭歌」等名篇多い。この他數文の論文雜筆に名作が多い。——(八三七)

ローシェン　耶士元　中唐の詩人。——一三七八

ローダン　老聃　有名なる戰國の哲學者道家の祖。——(二四一)

ローダン　Auguste Rodin(一八四〇—)フランスの彫刻家、畫家、エッチング作家。パリーに生れ、パリーの門に學んだ。一八七五年のサロンに二個の胸像を出したのがその處女作である。彼は嶮嶮な寫實家の手を以て、印象派の精神を行はうとするもの、その「黃銅の時代」(Age d' Airain)(ヴェルサイユ)は生きた肉身を型に用ひたといふ非難をさへ受けた位である。彼の作り出だす形像は死人に新生の感を與へる。彼は一種一時に生命の波が打つてゐる飾の產物ではない。彼の作品は單に作者の思想を表現するのみならず、而して作者はこの複雜な心理の變相を綜合統一する驚くべき力を有つてゐる。「バルザック」像、「內心の聲」「接吻」「法王者ヨハネ」何れも一度は非難攻擊に曝された。——(二五〇五)

ローペ・デ・ヴェガ　Lope de Felix Vega Copis(一五六二—一六三五)イスパニアの劇作家。マドリッドに生れ、その地のジェスキット學校に學んだ。軍人として例の「無敵艦隊」の役にも出た。この慌忙の間に雜誌を出さず、十二歲のときより始めて劇詩、叙事詩田園小說、宗教詩、十四行詩二千種以上を作つた。晚年宗教界に入つて信徒を學ぶ。——(六五八)

ローラン　Claude Lormine(一六〇〇—八二)フランスの風景畫家。シャマーニュ(Chamagne)で生れ、ローマで歿した。本名をクロード・ジェリエ(Gelée)といふ。理想的な風景畫を描いて十七世紀第一と稱せられる。——(二三六八)

ローロ　阪谷朗廬(一八二一—一八一)名は素行、備中川上郡九谷村の人。文政四年生る。稱米の門に出で、泥まず、著作「左傳」「詩經新註」「素讀」以下數種あり。——(一四〇)

ロアン　小淺蕉庵　江戶中期の歌人。姓は平、名は安平、蕉龍又觀河堂と號した。居張に生れ、少時は大阪で育つた。後年して京都に赴き公卿の家に仕へたが三十三歲の時退職して岡崎村に退き吟詠を樂しむだ。壯年の頃は劍道を修行して歩いた非もあつた。歌は冷泉爲村に學んだが、後一派を起し「たゞ言歌」と稱してマネ淡自然の調を詠み出した。享保元年七月十二日歿す、年七十九。著作に「天竹詠草」「向拾遺」「ふるの中道」「ふり分髮」「觀河堂」「家言」「觀河堂國雅」「和中和歌六帖」など。「よそにのみ思ひなれにし白雲を今は現想のものとぞ見れ」「變き來る夜の風にうづもれてたえ間からなる谷のかゞり音」「寂に吹く風も風になりにけり北窓ふたげ雪もつもりぬ」——(一二八)

ロイスダール　Jacob van Ruisdael(一六二八—八二)オランダの風景畫及び海洋畫家。ハーレムに生れて歿した。樹と水とを描いて得意であつた。ホベマは此人の弟子である。——(二三四九)

ロクシヨウ　六條國　マサモチ(石川雅望)

ロシドー　蘆思道　唐の詩人、字は子行、范陽の人。——(二三五、二三七)

ロシニイ　Giachomo Antonio Rossini(一七九二—一八六八)イタリアの歌劇作家。——(二三六七、解題二三九)

ロシヨーリン　蘆照鄰　初唐の詩人。字は昇之、幽州范陽の人。——(九月九日蘆照)「九月九日陪山川、節心節効菊風賦」「他鄉共酌金花酒、萬里同悲涌塞天」(二七一)

ロスイ　青木艮水(一六五八—一七三三)江戶初期、京都の俳人。立圃門。著作に「俳諧新式」「俳諧入門五種」——(補)

ロスタン(エドモン)　Edmond Rostand(一八六八—一九一四)フランスの劇作家。マルセーユに生れた。フランスの劇壇に於て、今年未だ四十五才ではかりで、未來の多い作家である。彼の特色は純文劇に在る。純粹の詩の思想をドラマに移して成功した。孤文の詩劇 "Romanesqus" (1894)はむしろ劇的分子の勝つたもので、"Cyrano de Bergerne"(897)に至つて光も非の詩と劇を結合した點に於て成功してゐる。"La Princesse Lointaine,(1895)"La Samaritaine (1897)は何れかといへば詩として讀むべきものである。一八九四年に"Romanesqs"はフランス座(Theatre Francais)で大成功を博した。一九〇三年に日露戰爭に對けられた。(六三)

ロセツ　長谷蘆安(一七五八—九九)江戶中期國山派俳諧家。名は益、字は來軒、蘆庵門下の俳諧、道の清士で、俳風奔放、樣圓では師を凌ぐといはれる。宇宙が探勝を迫はれたるに以て、蘆安も師に從はれずして、その門を迫はれた。——(補)

ロセッチ　Dante Gabriel Rossetti(一八二八—一八八二)イギリスの詩人。ロンドンに移住したイタリア人の子である。チニッシ、ブラウニング以後の近代英國詩壇に最も花々しい活動を演じたものは、かのラファエル前派(P. R. B.)の運動である非及び此の派の運動の始めは繪畫の上から起つたものである非は、未だ樹英文學史の頁に說かれてある如くである。詩人たり畫家たるダンテ・ガブリエル・ロセッティは實に此の運の繪畫と詩の兩方面に亘つての曉將である。彼はラファエル前派そのものゝ總趨と同じく始めはルーマン・ハント、ベーン・ジョーンズ等と共に繪畫の方面から進み、後詩の方面へ進み入つた。ロセッティが始めて詩を公にしたのは、一八五〇年ラファエル前派の機關雜誌 "Germ" の發刊と共に、その誌上に於てであつた。が左程世の注意を惹かなかつた。一八六二年に主り "Poems"を出さうとしたが、折柄愛妻の死に遭ひ、哀情の餘り妻の棺と共に土中に埋めてしまつた。が友人等の忠告で、一八七〇年に至りそれを掘出して公にした。けれどもその詩集に對する世評は甚だしく酷なものであつた。後十年 "Ballads and Sonnets" を出版した。その頃から漸く彼の眞價が認められた。詩の方面に於けるロセッティの特色は、矢張り繪畫の方面に於けると同じく其の中古的色彩の濃厚なのにある。モーリス、スキンバーン等は彼と運動を共にした詩人で最近の英國詩壇では、ラファエル前派の勢力は非常なものであつた。此等同人の傾向は宗教界に於ける ナックフォード・ムーブメントと並んで、十九世紀の知識的變遷に對する感情の反抗である。純英的感情に載した一種の新情緒派とも名づくべき運動である。地上に天國の美を夢みんとするものである。コールリッヂ、キーツを經て英國詩壇の一方に流れて來た中古的純美的感情を極端まで押し進めたのはロセッティである。ロセッティの詩で最も名のある作は "The Blessed Damozel" "Love's Nocturn" "Sister Helen" 等の長詩及び "House of Life" 中に收められた多くのソネット(十四行詩)である。就中彼のソネットはソネットとしては古來比肩すべきものの少なしとまで稱せられて居る。最も廣く愛讀せられて居るのは「聖處侍女」(The Blessed Damozel)で、彼の詩の特色は最もよく此の作に發揮されて居る。地上の戀人に別れて昇天して天女の群に入つた若き女の、同り淋しく地上の戀人を忘ふ聖き戀の情を歌つたもので、初稿の色彩と優美な情緒とに充ちた詩である。黃金づくりの天の欄に倚れて、手には三枝の百合の花を持ち、額には七つの星をかざし涯なる水よりも深き眼で、遠く時の流を隔てた下界を眺めて悠ゆる思に地なる戀人の昇天を待つ聖天侍女の情緒は、詩心若しくは夢ある如き境致に誘ふ。戀愛の中に宗教があり、戀歌の中に神秘がある。殊に調子の流麗な點に於ては、ロセッティの詩は群を拔いて居る。色彩の明麗と調子の流麗とは此二つを以て、彼の詩は後に永世的特色を有つ。——(七五三三六〇)

ロセッティ　(クリスティナ)Chrisiana Georgina Rossetti,(一八三〇—一九四)イギリスの女詩人。ロセッティと共にイギリス十九世紀の詩人として有名である。イタリアの愛國詩人ガブリエル・ロセッティの女でロンドンに生れた。伊伊に暫時の間旅行した外はロンドン市外に足を向けた非は殆どない。非の詩は眞に女性らしき弱性の詩として、即ち弱性として、女性を見たる感情の純潔なのを以て知られてゐる。形式の上に於て、流暢巧麗なる極め若樂的のチャームを有すること。晚年には初期の作より見た神秘的信仰が全く感情的宗教の域に進み、非の頃の詩は全く敬虔なる獻身的なる信仰の降となつてゐる。作は "Goblin Market (1862); Verses' (1874); The Princes Progress (1866); Sing-song (1872); "Annes Domine (1874)

Seek and Find' (1879); A Pageant and other Poems (1881); Called to be Saints (1881); Poems (1892); Time Flies (1885); The Face(of the Deep) (1892); Verses (1893) 等二三ある。——(三十八)

ロソケン 呂宋縣(英米)（一一三七—八一）南米の文家。——(二九一)

ロタク 路鐸　独逸の詩人。——(三〇一)

ロット Edouard Rod（一八五七—）フランスの小説家。ロッド家は元来スキタッル人であるが久しくフランスに住つた。家で、ニヤーテルはダンフエル訓詩のミヨン(Nyon)で生れた。初めはソラの終下に參じて純自然派風の作を出したが、中頃心理的分析的な社會小説に轉じた。"La vie privée de Michel Teissier" "LeSilence" "Dernier refuge" "La-Haut" "Le menage du pasteurs Naudie" 等はその主な作。——(補)

ロビア Luca della Robbian（一四〇〇—八〇）イタリー・フロレンスの彫刻家。在燒付粘土浮彫の祖。——(一四九四)

ロチイ Pierre Loti(Louis Marie Juban Viaud（一八五〇—）フランスの小説家。ニフォール(Pochefort)に生る。海軍に入り中將として一八八三年東京の役に從ふ。外國を旅行し人情風俗を視察し、これをもとして幾多の空想的彩筆にとめる小説を作つた。結構故説新と無謀危のもの多けれど印象派風の描寫に巧緻を極めてゐる。ポスフォラスの說話等を材とせる "Azuyad (1871) を初作として、"Le Roman dl'un Saphi" "Le pecheur d'Island 等相繼ぐ。日本に遊べて、"Madam Crysaneme" (1887) "Japonneures d'Automne, 等の作あり。一八九一年アカデミーに入つた。——(六二八)

ロリ 廻倫　中古の詩人、大歴十才子の(一一七八)

ロングフエロー Henry Wadsworth Longfellow.（一八〇七—八二）アメリカの詩人一八〇七年二月佛の木蔭美しきポートランドのメイン町に生る。父は立憲政治法律家で母はもと共想人であつたと言ふ。斯うした両親の手元で育られ乍ら幼少は頗る善良であつたと言はれ又皮らぬ。母くより常に親しむだがやゝ長ずるに及んでからは樹くの海の面に立つてうつかしき少年の夢に惚られ、或は靜かなる思ひに成り乍ら樹を遊遊ぶのを楽しみとする樹に成つた。十三歳にして早くも詩を作り、十五歳にしてポートイッの大學に入つた。ホーソーンと同級であつたと言ふ。在學中も盛んに作を綴り詩人たらんとの志望止み難かつた。卒業の翌一八二六年歐洲に赴いて、フランス、ドイツ、イタリア、イスパニア等の語學を研究した。三年にして歸國すると母校に教授を執つて近世語學の講座を擔任した。一八三四年にはハーバード大學の教授と成つて北歐の首都ボーダーに及んで詩人が或時はやる方無く「天使のあゆみ」(The Footsteps of Angels) なる詩に人かなる句ひを通はしたと傳へられて居る。一八三六年に前回してヴェルナッチなる「クレイグ・ハウス」(Craigie House)に居を定めて六年間教授の職に在つた。先輩主として改革に從事を樂めて居た。彼は此頃間から盛んに散文を作つて雜誌に新聞に好新を傳した。有名な「夜の聲」(The Voices of theNight) の成つたのも此期に関する。一八四三年にはフランセス・アップルトン嬢と結婚して非度彼女の死に到る迄十七年間幾度なく生涯が送られた。彼は此第二の戀愛に進進して共進作の性と教授の職とは過た無かつた。深い思想と洗練な感覚との中に送られた詩人が孤獨の既年生涯は詩「港にて歌へる」(In the Harbar) を其美しき起元として一八八二年の六月十五日に終りを告げた。——(八三五)

ワ

ワーツワース William Wordsworth（一七七〇—一八五〇）イギリスの詩人。——(七六三、八〇五、解題一四三)

ワイデン Roger Van der Weyden（一三九九—一四六四）フランドースの古畫家。タールネイに生れ、アッシセルの市畫師として終した。アンスアイクの弟子で、フランス遠の手工を極つた。——(二三四三)

ワカサ 野口若狭　浮世絵の名家。——(二一八一)

ワカサノジヨー 竹本若狭掾　義太夫節の名家。——(二二六七)

ワカタユー 豊竹若太夫　義太夫節の名家。——(初代)(二二九三—二二九六)（二世）(二三〇四)

ワグネル Wilhelm Richard Wagner（一八一三—八三）ドイツの歌劇作家。一八一三年五月二十二日ライプチヒに生る。父はフランネルが生れて六ヶ月目に歿くなつたので、母はドレスデンの俳優ルドルヒ・ガイエル(Ludwig Geyer)に再嫁した。マートーエン以後の一人とは云はれた天才も少時は特に劣てた樂才も示さず初めてワイマンル(Th. Weinlig)に就いて音樂を學んだのは大學を出て進んだ後であつた。初めてシムフォニーを作つたのは二十歳の時（一八三三）其後ピアノのソナータ曲を作つた。何れも型式の平凡な作であつた。一八三四年、マグデブルヒの市立劇場の指揮者となり、女優ミンナ・プラーネル (Minna Planer) を妻とし、一八三六年ジヨーグスヒアの「メヨーア・フォ・メヨーア」に本いて初めて歌劇 "Liebesverbot" (戀の禁制) を作つた。後又ケーニヒスベルヒ、リガ等の劇場に轉れ、一八三九年にはパリーに赴き、糊口の資の倍愛の作曲演奏をやり乍ら、一方第一の革新的歌劇「リエンツ」の製作を完成し「フリスト」序曲「飛翔船の幻人」等の作を試みた。一八四二年パリーを上出つてドレスデンに赴き、愛で初めて「リエンツ」を上出する事が出來た。これが一八四三年十月二十日、ワグネルの習作時代はこれを終局とする「タンホイゼル」（一八四五）「ローエングリン」（一八四八）もドレスデン住居の間に成つた。「ニベルンゲンの指環」の脚案も早くこの頃に出來た。一八四九年五月の反亂に關係した咎過れてワイマルのリストの許に成し、更にルニーリヒに移居して歌劇革新の事業に專心する事になつた。「藝術と革命」(Die Kunst und die Revolution' (1849)「將來の藝術」(Das Kunstwerk der Zukunbt)「オペラと戯劇」(Opera und Drama" 1851) 等はまづ彼の主張を理論の形で現はしたもの、これを具體した「ウイン・ゴールド」「ワルキューレ」「ジーグフリード」「トリスタンとイソルデ」等の一部は、この間に成つた。また一八五五年にはロンドンに行き、一八六一年の夏にはウィンナに赴いて初めて「ローエングリン」の演奏をきいた。再びサクソニーに歸つたのは一八六二年であつた。この後所謂ライトモチーフを用ゐ、樂劇を唱出した後年期の活動は來關の音樂史と解題にゆづつて委しくは述ぶる。一八六四年にはバヴァリア侯ルートヴヒッヒ二世に在る事一年、ミュンヒエンに近きトリーブシェン(Triebschen)に往り安住年浩樂歌劇「マイスターゼンガー」（一八六七）「ヴァーグフリード」（一八六八）を完成し、「神々の黄昏」相繼ぐ成した。一八七〇年リストの妹で、フォン・ブユーローの妻であつたコヲヤ(Cosima)を後妻に娶つた。一八七二年終にバイロイトを永住の地と定め、同年自家の理想に本づいて一大ヤマウ劇場を創立し、一八七六年落成して其の時始めて「ニベルンゲン」四段曲全部を上出した。次いで一八八二年前後の傑作「パルシファル」同じく此處で演奏されたが、未だ十分この劇場に對する理想を行ふ能はなく、翌年の二月十三日ヒニスベで急病に於いて歿したのは惜しむべき事である。子、ヴーグフリード (Siegfried Wager 一八六九—) も音樂家として名がある。——(ルヴ一九四九、一九三一、三三六〇、三三六六、解題一四〇、一四七)

ワツツ George Fre derick Watts（一八一七—一九〇四）イギリスの畫家、彫刻家。ロンドンで生れたアカデミーへ陳列したのは一八三七年が始めであつた。後年、象徴的の作品を出した頃のものとして「信仰」「希望」「愛」「愛と生」「愛と死」等がある。一八六七年英藝院に入つた。——(二三六一)

ワツツダントン Walter Theodore watts Dunton（一八三六—）イギリスの詩人批評家。ハンチンドン(Huntusgdon)の聖アイサス (Jves) に生る少時ヲアシイの生活に親接し、その熱烈な想像を養つた。一八七四年「エキザミナー」誌の記者となり、次いで「アセニアム」に批評論文を寄稿して二十年の久しきに及び、アーノード以後第一の批評家たる資位を認められた。——(八一六)

ワトウ Antoine Watteau（一六八四—一七二一）フランスのロココ畫家。アンジエンヌで生れ、ヨエントで歿した。一七〇二年パリーの出て、ルキサンブール宮の裝飾に從つた。そしてルーンスニの畫を研究し、感覚的豊富なのを悦んだ。その作つた祭禮の絵やイタリアの喜劇俳優をモデルにしたものとて赤や青や、白で複雑の調子に書いた者であつた。ルーヴル宮ロンドン、ベルリン等に其作品を見る。——(二三六九)

とした。一八三六年ジヨーグスヒアの「メヨーア・フォ・メヨーア」に本いて初めて歌劇 "Liebesverbot" (戀の禁制) を作つた。後又ケーニヒスベルヒ、リガ等の劇場に轉れ、一八三九年にはパリーに赴き、糊口の資の倍愛の作曲演奏をやり乍ら、一方第一の革新的歌劇「リエンツ」の製作を完成し「フリスト」序曲「飛翔船の幻人」等の作を試みた。一八四二年パリーを上出つてドレスデンに赴き、愛で初めて「リエンツ」を上出する事が出來た。これが一八四三年十月二十日、ワグネルの習作時代はこれを終局とする「タンホイゼル」（一八四五）「ローエングリン」（一八四八）もドレスデン住居の間に成つた。「ニベルンゲンの指環」の脚案も早くこの頃に出來た。一八四九年五月の反亂に關係した咎過れてワイマルのリストの許に成し、更にルニーリヒに移居して歌劇革新の事業に專心する事になつた。「藝術と革命」(Die Kunst und die Revolution' (1849)「將來の藝術」(Das Kunstwerk der Zukunbt)「オペラと戯劇」(Opera und Drama" 1851) 等はまづ彼の主張を理論の形で現はしたもの、これを具體した「ウイン・ゴールド」「ワルキューレ」「ジーグフリード」「トリスタンとイソルデ」等の一部は、この間に成つた。また一八五五年にはロンドンに行き、一八六一年の夏にはウィンナに赴いて初めて「ローエングリン」の演奏をきいた。再びサクソニーに歸つたのは一八六二年であつた。この後所謂ライトモチーフを用ゐ、樂劇を唱出した後年期の活動は來關の音樂史と、解題にゆづつて委しくは述ぶる。一八六四年にはバヴァリア侯ルートヴヒッヒ二世に在る事一年、ミュンヒエンに近きトリーブシェン(Triebschen)に往り安住年浩樂歌劇「マイスターゼンガー」（一八六七）「ヴァーグフリード」（一八六八）を完成し、「神々の黄昏」相繼ぐ成した。一八七〇年リストの妹で、フォン・ブユーローの妻であつたコヲヤ(Cosima)を後妻に娶つた。一八七二年終にバイロイトを永住の地と定め、同年自家の理想に本づいて一大ヤマウ劇場を創立し、一八七六年落成して其の時始めて「ニベルンゲン」四段曲全部を上出した。次いで一八八二年前後の傑作「パルシファル」同じく此處で演奏されたが、未だ十分この劇場に對する理想を行ふ能はなく、翌年の二月十三日ヒニスベで急病に於いて歿したのは惜しむべき事である。子、ヴーグフリード (Siegfried Wager 一八六九—) も音樂家として名がある。——(ルヴ一九四九、一九三一、三三六〇、三三六六、解題一四〇、一四七)

ワツツ George Fre derick Watts（一八一七—一九〇四）イギリスの畫家、彫刻家。ロンドンで生れたアカデミーへ陳列したのは一八三七年が始めであつた。後年、象徴的の作品を出した頃のものとして「信仰」「希望」「愛」「愛と生」「愛と死」等がある。一八六七年英藝院に入つた。——(二三六一)

ワツツダントン Walter Theodore watts Dunton（一八三六—）イギリスの詩人批評家。ハンチンドン(Huntusgdon)の聖アイサス (Jves) に生る少時ヲアシイの生活に親接し、その熱烈な想像を養つた。一八七四年「エキザミナー」誌の記者となり、次いで「アセニアム」に批評論文を寄稿して二十年の久しきに及び、アーノード以後第一の批評家たる資位を認められた。——(八一六)

ワトウ Antoine Watteau（一六八四—一七二一）フランスのロココ畫家。アンジエンヌで生れ、ヨエントで歿した。一七〇二年パリーの出て、ルキサンブール宮の裝飾に從つた。そしてルーンスニの畫を研究し、感覚的豊富なのを悦んだ。その作つた祭禮の絵やイタリアの喜劇俳優をモデルにしたものとて赤や青や、白で複雑の調子に書いた者であつた。ルーヴル宮ロンドン、ベルリン等に其作品を見る。——(二三六九)

ワンアイク (兄弟)Van Eyck ヒューベルト (Hubert 一三七〇—一四二六) ヨハン (Jan 一三九〇—一四四〇) 十五世紀のフランダース畫家。北方に復興期繪畫派の祖を創めた。主としてゲントと及びブルーグで製作した。兄ヒューベルトは有名なゲント寺院聖壇の爭 "Adoration of Lamb" (羊群の礼拝) を描いて中途で歿す。弟ヨハンその業を継いで一四三二年之れを完成し、其後死に至るまで聖壇の畫や、純繪畫的な肖像畫の名作を殘した。彼に油絵の技は其初彩色と成ると傳へる。ロンドンの國民畫廊に蔵するヨハン・アルノルフィニ夫妻の像は肖像の畫の傑作の逸品である。——(二三四四)

ワンダイク Sir Anthony Van Dyke（一五九九—一六四一）フランドース派の肖像畫家。アントワープに生れ十五歳の時ルーベンスの門に入つた。十七歳にして已に弟子より一六二〇—一五年のイタリア旅行から歸つて後はアントワープ宮廷畫家の主席を勤め、既出畫、宗教畫の大きなものを出した。彼はフランダースに生れ、人となつたにも係らず、義者なスペイン風の影響も受つて、一六二一年、英國でジエームス二世の肖像を描き一六三二年には宮廷畫家に任ぜられた。彼の肖像畫の大作、傑作は、大概英國にある。イギリス畫派が彼の影響を受けたのは大したものであつた。スペイン人が「清淨受胎」を描き、ルーベンスが合唱の歌聲を視したあとで、歌樂の後に來るべき悲哀は來た。ルーベンスの燃え焦ふ情熱のあとにヴン・ダイクの悲哀の如き悲が續いた。彼は貴族でもなければ平民でもなかつた。父は海産な組織人で、母は訓練の名手であつた。ヴン・ダイクの畫は人の目に立つと、鋭く光る組織な思はせられるのも無理はない。上品で、雪白い、女のやうに繊弱で、髪は

ユース等の獨語なし、タイマール詩人連の機關雜誌 "Der Deutsche Merkur" の編輯者（一七七三―一八一八年）として完全な才能ある所を示した。全集五十三卷は一八一八年から一八二年にかけて出版された。一九〇〇年(Kleo)版のものもある。" Ausgewählte Briefe "は一八八九年六卷になつて出た。―（八九八）

ヰクリフ John Wicliff（一三二〇頃―一八四）イギリスの宗教改革家。―（六九一）

ヰニイ Alfred de Vigny（一七九七―一八六三）フランスの詩人。ローシヨ (Loches) に生る。アカデミーに入つたのは一八四三年―。（五九六、六一〇）

ヰンケルマン Johann Joachim Winkelmann（一七一七―一七六八）ドイツの美術批評家。プロシアのテンデルに生る。一七四八年ローマ伯(Graf von Bünau)の圖書掛となり、ドレスデンの名畫和蘭製畫に出入する機會を得た。其結果として「ギリシア建築及びギリシヤ十彫刻術の模倣に關する意見」(Gedakenüber die Nachahmung der griejhischen Werke in der Malerei und Bied hauerkunst"（一七五四）となつて現れた。翌年羅馬に改宗し、後ローマの名譽圖書館長となり、一七六〇年（ローマに於て）アルバニー大枢卿 (Cardinal Albani) の圖書館に生をられ、ハンマイ「古代論」(Ammerkungenüber die Baukunst der Alten) を出版した。次いで一七六四年彼の晩年を飾ること者「古代藝術史」(Geschichte der Kunst des Altertums) 外全集した。―（八九八）

ヰルデンブルフ Ernst von Wildenbruch（一八四七―）ドイツの小說家、詩人、戲曲家。シリアのメイルートに生れた。一八六六年及び一八七〇―七一年の戰爭に從軍後フランクフルト及びマルツの刑務となつたが、一八七七年外務省に入つた。彼は戲曲家として著名なる。"Harold" "Die Karolinger" "Der Generalmit" "Die Quitzows" "General feldoberst" "Meinrich und Heinrihs Geschlecht" "Die Tochter des Erasmus" "Konig Laurin" 又小說家として詩人として聞こえた。"Der Meister von Tanagra" "Novelen"（小說）"Vionville" "Sedan" "Fridericus und Dalinden"（詩）。―（八四八）

ヱ

ヱーベル Karl Maria Weber（一七八六―一八二六）ドイツ、ローマン派作曲家。―（一九四九、三三四四、三三五六、解題一三八）

ヱラスケス Diego Rodriguez de Silva y Valsquez（一五九九―一六六〇）イスパニアの畫家。西班牙の畫家の最大なるものの一にして、同じくイスパニアの畫家エリリヨが彼よりも平民的な圓圓の中に人となつた丈により多く取材の範圍がひろく個性の強しくない畫に勢を得たるに對して、能率な寫實的な畫風の代表者である。セヰヤリヤに生れて、レンラ (Herera) パチエコ (Pacheco) 等に教て學び、パチエコの姐を娶つてその家で、セルバンテスや當代の貴族と相知るに至つた。一六三三年大臣の招きに應じてマドリッドに到り、ニ人に王フヰリツプ四世の肖像を命じて認を得、宮廷畫家となつて、種々の職務をとつた。北地位は彼をして教會の職務を勸め、宗教裁判所の成績を見れしめた。かくて、宗教的の題目に特別毛を過らず、感覺がなくなつたのが、彼をして、主に、近世的寫實的の傾向をもつたのは、この近世的の時は十九世紀になつて始めて唱められて來た。故國にあつては彼の影響はあまり廣くはなかつた。が、今日のイギリス、フランス、アメリカの諸派は彼に負ふこと多し。彼の作品は、"Harold" "Die Karolinger" "Der Generalmit" "Die Quitzows" "General feldoberst" "Meinrich und Heinrihs Geschlecht" "Die Tochter des Erasmus" "Konig Laurin" 又小說家として詩人として聞こえた。"Der Meister von Tanagra" "Novelen"（小說）"Vionville" "Sedan" "Fridericus und Dalinden"（詩）。―（八四八）

ヱ

ヱーベル Karl Maria Weber（一七八六―一八二六）ドイツ、ローマン派作曲家。―（一九四九、三三四四、三三五六、解題一三八）

ヱラスケス Diego Rodriguez de Silva y Valsquez（一五九九―一六六〇）イスパニアの畫家。西班牙の畫家の最大なるものの一にして、同じくイスパニアの畫家エリリヨが彼よりも平民的な圓圓の中に人となつた丈により多く取材の範圍がひろく個性の強しくない畫に勢を得たるに對して、能率な寫實的な畫風の代表者である。セヰヤリヤに生れて、レンラ (Herera) パチエコ (Pacheco) 等に教て學び、パチエコの姐を娶つてその家で、セルバンテスや當代の貴族と相知るに至つた。一六三三年大臣の招きに應じてマドリッドに到り、ニ人に王フヰリツプ四世の肖像を命じて認を得、宮廷畫家となつて、種々の職務をとつた。北地位は彼をして教會の職務を勸め、宗教裁判所の成績を見れしめた。かくて、宗教的の題目に特別毛を過らず、感覺がなくなつたのが、彼をして、主に、近世的寫實的の傾向をもつたのは、この近世的の時は十九世紀になつて始めて唱められて來た。故國にあつては彼の影響はあまり廣くはなかつた。が、今日のイギリス、フランス、アメリカの諸派は彼に負ふこと多し。彼の作品は、

全世界にちらばつて、大きい眼、目が使はれてゐるように、かと思へば、悲しそうに見へる。一彼は婦人に愛される型である。彼は一貫故郷の上品な神秘な生活を好人だ。繁榮讃美には、そうと知られて貴婦人達を慰し、外出には必ず傘を持つた。フランダースの雜畫の間に、貴婦人達と呼ばれたのは無理もない。他の畫家達と調和し得る畫家は、一人の藝術家になる者に生涯人だ方が必要がよかつた。ヴィンの騎士はローマを去つてヤンプに向つた。そこには彼を笑ふフランダース人もなく、明るいイタリアの畫家もない。美しい女、非常な貴婦人達が、優雅な貴婦人の樂が、皆ては、彼全を感じて、今は歌謠詩樂の中に、ひゆく此の古き市街を感ぶた。彼は二ヶ月、その住まふべき地を求めた。彼の製作は上流の人々の今する處となつた。彼は生れた作らにして貴族の竹像畫家であつた。彼の出た時は、ヨーロッパの混亂時代に過ぎ去つて、一社會が既に一定の階級を形つくつてゐた。彼はかくの如き時代に生きて、貴族の間に出入する光榮とした。皆て、チャプンが帝チャーレス五世の御御に感じて、嘆たゝ動かさなかつたのにひきかへて、彼は王チャーレス一世が今日を共にしたのを榮譽とした。彼はルーベンスの如く、西約聖書から題材をとつて、「スザンナの浴」の如きものをかいた。ルーベンスの筆では、見つた、所い眼の、美しい肉のフランダースの女が、成つてゐる、因めくような赤と、頭いてゐる白とが、色彩畫法に行き渡つた、ヴィンダイクは、しなやかな、新い愛のイタリアの女が描いてゐる。その暗い黃褐の、深い褐色の衆色から黃金のやうに輝くのは、巨大な力士が女を抑へ、ようと、眼、頭り上るのに、アンドレアの、神士が二人、服裝を報にしながら、一人が優しく女の腕を打つてゐると、一人が女の目から離さにつつめて、天使によつて、戀を語つてゐる。

彼の約全集、聖徒達などは、ルーベンスは、肉色、現世の光彩をうらはすべき色を使ひ、アンドイクは、神秘な結果を胸に立たせた。古代貴族時代の最い美しい日は、ライに終に近づいて、アン・ダイクは、その時の明星であつた。その最後の彩の色彩は、青白く、冷めて、秋かい月の光が射つたやうに思はれる。―（三三四五）

ヰ

ヰーランド Christph Martin Wieland（一七三三―一八一三）ドイツの作家。ウンルテンベルヒに生る。初期の作は、大抵半試作目的、質貧の乏しいものが多いである。"Der geprufte Abraham"（一七五三）、"Empfindungen eines Christen"（一七五五）。其後フランス文學の影響を受けて、温かな快樂主義を盛き入れるやうになつた。この期の作では、小說 "Agathon"（一七六六―七）が最もよく知られてゐる。一七六九年エルフルトの大學教授に任ぜらる。この時分から人生問題に深く思を沿めるに至つた。其結果は哲學小說 "Der Goldene Spiegel"（一七七二）となつて現れた。この作によつて彼はアイマール公爵の三子カール・アウグスト及びコンスタンチンの師傅に聘せられた。"Geron der Adelich"（一七七七）、"Die Abderiten"（一七八一）、"Oberon"（一七八七）等は皆アイマールで書かれた。史詩オベロンは彼の最傑作で、其中の主なる物は、フランスのコルネル・ド・ボルドー (Huon de Bordeau) の古い物語から取つたものである。彼の雅び女詩風と、爽かなユーモアとは、當時のドイツ文壇では頗る新奇がられたので、始人とクロプストックの非難を受した樣であつた。彼は又シェークスピア（十二種）（一七七三―一八一九）ヴェルヒ、ユース等の獨語なし、タイマール詩人連の機關雜誌 "Der Deutsche Merkur" の編輯者（一七七三―一八一八）として完全な才能ある所を示した。全集五十三卷は一八一八年から一八二年にかけて出版された。一九〇〇年(Kleo)版のものもある。" Ausgewählte Briefe "は一八八九年六卷になつて出た。―（八九八）

ヰクリフ John Wicliff（一三二〇頃―一八四）イギリスの宗教改革家。―（六九一）

ヰニイ Alfred de Vigny（一七九七―一八六三）フランスの詩人。ローシヨ (Loches) に生る。アカデミーに入つたのは一八四三年―。（五九六、六一〇）

ヰンケルマン Johann Joachim Winkelmann（一七一七―一七六八）ドイツの美術批評家。プロシアのテンデルに生る。一七四八年ヒューナウ伯(Grab von Bünau)の圖書掛となり、ドレスデンの名畫和蘭製畫に出入する機會を得た。其結果として「ギリシア建築及びギリシヤ十彫刻術の模倣に關する意見」(Gedakenüber die Nachahmung der griejhischen Werke in der Malerei und Bied hauerkunst"（一七五四）となつて現れた。翌年羅馬に改宗し、後ローマの名譽圖書館長となり、一七六〇年（ローマに於て）アルバニー大枢卿 (Cardinal Albani) の圖書館に生をられ、ハンマイ「古代論」(Ammerkungenüber die Baukunst der Alten) を出版した。次いで一七六四年彼の晩年を飾ること者「古代藝術史」(Geschichte der Kunst des Altertums) 外全集した。―（八九八）

ヰルデンブルフ Ernst von Wildenbruch（一八四七―）ドイツの小說家、詩人、戲曲家。シリアのメイルートに生れた。一八六六年及び一八七〇―七一年の戰爭に從軍後フランクフルト及びマルツの刑務となつたが、一八七七年外務省に入つた。彼は戲曲家として著名なる。"Harold" "Die Karolinger" "Der Generalmit" "Die Quitzows" "General feldoberst" "Meinrich und Heinrihs Geschlecht" "Die Tochter des Erasmus" "Konig Laurin" 又小說家として詩人として聞こえた。"Der Meister von Tanagra" "Novelen"（小說）"Vionville" "Sedan" "Fridericus und Dalinden"（詩）。―（八四八）

ヱ

ヱーベル Karl Maria Weber（一七八六―一八二六）ドイツ、ローマン派作曲家。―（一九四九、三三四四、三三五六、解題一三八）

ヱラスケス Diego Rodriguez de Silva y Valsquez（一五九九―一六六〇）イスパニアの畫家。西班牙の畫家の最大なるものの一にして、同じくイスパニアの畫家エリリヨが彼よりも平民的な圓圓の中に人となつた丈により多く取材の範圍がひろく個性の強しくない畫に勢を得たるに對して、能率な寫實的な畫風の代表者である。セヰヤリヤに生れて、レンラ (Herera) パチエコ (Pacheco) 等に教て學び、パチエコの姐を娶つてその家で、セルバンテスや當代の貴族と相知るに至つた。一六三三年大臣の招きに應じてマドリッドに到り、ニ人に王フヰリツプ四世の肖像を命じて認を得、宮廷畫家となつて、種々の職務をとつた。北地位は彼をして教會の職務を勸め、宗教裁判所の成績を見れしめた。かくて、宗教的の題目に特別毛を過らず、感覺がなくなつたのが、彼をして、主に、近世的寫實的の傾向をもつたのは、この近世的の時は十九世紀になつて始めて唱められて來た。故國にあつては彼の影響はあまり廣くはなかつた。が、今日のイギリス、フランス、アメリカの諸派は彼に負ふこと多し。彼の作品は、

ノ）イタリアの歌劇作家。——（二二六ページ、解題一五〇）

ヴルハーレン Emile Verhaeren（一八五五—）ベルギーの詩人。フランドルの近傍で生れた。一八八〇年初めて"Les Flammandes"を出してその作力を認められた。爾来"Les Flambeaux Noirs"（1890）より"Les Forces Tumultereuses"（1901）に至る數篇の無韻詩は何れも强烈な色彩と强力とを特色とする。近年の"Les Tendresses Premiéres"（1904）"Les Heures d'Après-Midi"（1901）の作はよほど靈かな淡泊な調子に歸してゐる。ヴルハーレンは佛『啓光』以下數種の劇をかいてゐる。——（六四二）

ヴルレーヌ paul Verlaine（一八四四—一九六）フランスの淺薄詩人。一八四四年三月メッスに生る。父はベルギイより佛蘭西に移住した醫師で大財であつた。初作の詩は"Poemes Saturniens"（1866）であつた。其後ふと美少年詩人アルチュール・ランボー（Arthur Rambaud,）と親交を結び、手を携へて大陸諸國を放浪し（ヴルレーヌには妻の同棲があつたに拘らず）た、が、ベルギイのブリュッセルに來て、二人の間に爭が出來、ヴルレーヌは短銃を放つてランボーの腕を射た。その罪で彼は二年間獄屋につながれたが、再び出獄したときには立派な詩歌の作者となつて來た。けれども一月と經たぬ中に酒を酌過したかとて、また一ヶ月間人獄の身となつた。その後はロンドンに行き、また國に歸り英語の教師を負たり米酒を賣たりなどして暮を送つてゐたが、一八八六年中が死んでからは、また放浪生活にかゝつて歳にアブサントを飲みつゝ、遂に病獄に入り、出獄後、病勢の中に歳年を終つた。——（六〇四）

ヴロッキオ Andrea Verrachio（一四三五—一八八五）イタリア文藝復興初期のフロレンス派の黄金彫刻家。フロレンスに生れ、ヴェニスで歿した。ドナテルロの弟子で、ダ・ヴィンチの師として知られる。——（二四九三）

ヴロネーゼ Paolo Veronese（一五二八—一八八八）イタリア、ヴェニス派の畫家。行列、儀式、祭禮を好んでかいた。その大作は殆モスケッチの構想の表飾である。色彩派の偉々たるものであり、光と影と色との研究に盡した。ヴェニスの諸生活を寫したが皆その地方特有の個性の調子を帶びてゐる。——（二三一〇）

ヲ

ヲルテール François Marie Arouet de Voltaire（一六九四—一七七八）フランスの文學者。パリーに生る。法學士院の判官のチイヤッスキットの學校に教育をうけた。早くから諷刺、寸鉄、オード、悲劇の類に筆を染め「ヱデープ」（Edips）の短篇をなした。一七一二年ハートルダーム歌詩室修辭を題として來つたアカデミーの賞賜に法選した。其後暫らく法律を研究したが、ルイ十四世の崩後、摂政のオルレアン公を諷刺してバスチルの獄に投ぜられた。（一七一七）出獄後ヱデープ」の劇「テアトル・フランセーズ」に上演されて華華しい成功を收めた。ヲルテールと稱したのもこの時からである。この後の劇"Artémire"（1720）"Marianne"（1721）は共に捗々しからず、後また人と爭つて再度バスチルに投ぜられた。アンリ四世を頌した"La Henriade"の詩はこの頃に成つた。出獄後イギリスに渡りボリングブロークの紹介で當代の政治家、文人と交り、國情を視察した。歸國の後は專心文藝に從事し傍ら科學をやつて研究を作つた。宗教上、社會上の諷刺劇、哲學上の論文、其他歴史小説の類がこの期の著作の内容である。一七四〇年プロシアのフリードリヒ大王の招をうけて其宮廷に赴き王と親交を結んだ。其後ルイ十五世の寵を蒙つて再びフリードリヒ王の許に使し其功によつてアカデミーに入つた。（一七四六）後パリーに行きプロシアに赴き、フリードリヒ大王の諮詢をうけ、年金勅令を賦はつて王の作文の添削をやつてゐたが、三年の後王と合はずして去り暫時流浪の後、終に再び法國に定住し既年の三年を送つた。"Candide""Siécle de Louis Quinze""Dictionaire philosophique."等はこの間に成つた。數會に對する作意はいよ〳〵強くして遂に諷刺を活せてゐた。其後一時スイツに住つてゐたが間に歸した。——（五五三—五六三）（一六六〇）

ヲンデル Jooft van den Vondel（一五八七—一六七九）オランダの詩人。——（一六六〇）

331
1

084829−000−3

331−1

文芸百科全書

早稲田文学社／編

M42

DBA−0174